

鹿角盆地に於ける古代土器群の様相(I)

桜 田 隆

目 次

- 1 はじめに
 - (1) 鹿角盆地の位置と地形
 - (2) 古代史上の鹿角
 - (3) 鹿角盆地に於ける古代土器研究史抄
- 2 鹿角盆地内各所出土土器群の様相
 - (1) 万谷野遺跡
 - (2) 鳥野遺跡
 - (3) 高市向館跡
 - (4) 下乳牛遺跡
 - (5) 一本杉遺跡
 - (6) 中の崎遺跡
- 3 土器群の変遷と編年上の諸問題〔以下(II)〕
 - (1) 土器群の変遷
 - (2) 編年上の諸問題
- 4 まとめ

1 はじめに

(1) 鹿角盆地の位置と地形 (第1図)

秋田県の北東部に位置する鹿角盆地は、^(註)「青垣山を巡らす鹿角の地」といわれたように、東側を大森、五の宮嶽、北の林、皮投岳、中岳などの急峻な奥羽脊梁山地に、西側を高森、水晶山、三ノ岳、大森山、土筆森などのややなだらかな高森山地に囲まれた南北に細長い盆地である。盆地縁辺寄りを南側から流下する米代川は、岩手県四角岳にその源を発し、湯瀬溪谷を曲流したあと、八幡平から流れる熊沢川・夜明島川と、五の宮嶽から流れる歌内川・浦志内川を合せながら北流を続け、盆地中央の花輪・柴平地区で福土川・乳牛川・不動川・間瀬川・草木川を、盆地北部の毛馬内地区で十和田湖付近から流れる大湯川と青森県境の坂梨峠付近から流れる小坂川を合流させたあと、流れを西方に変え、大館盆地に流れ出る。

この米代川と米代川に流入する水系の両岸と盆地の内縁には数段の段丘が発達しているが、多くは十和田火山起源の火山噴出物の流入堆積と、盆地内の大小河川の浸食・開析・下刻作用を受けたものである。盆地中央部と東南部では段丘の一部を被覆する扇状地堆積も認められる。

周囲を山々に囲まれ孤立しているかのように見える鹿角盆地であるが、交通の要地であり、

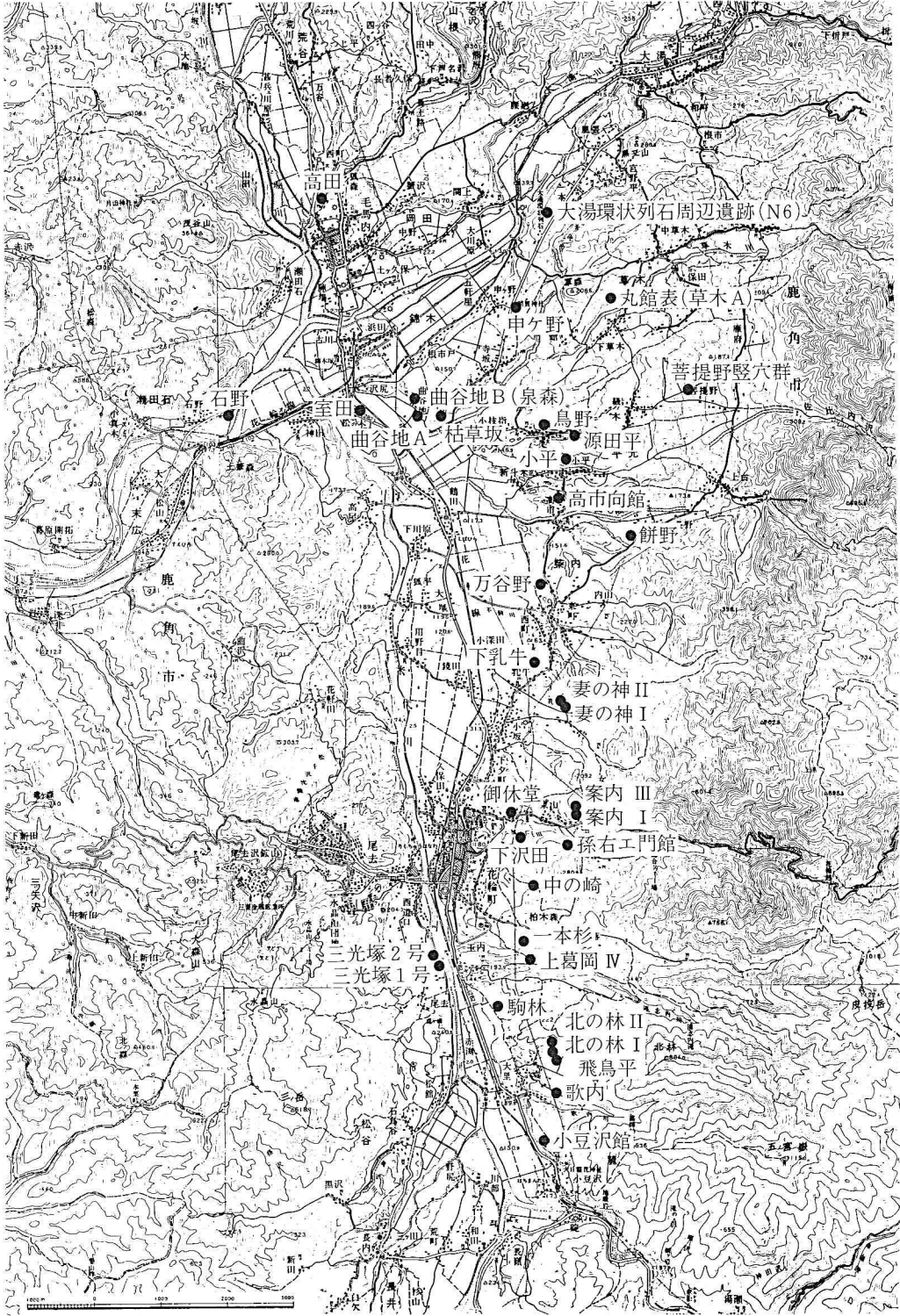
文化的にも閉鎖的な環境ではない。

註 「鹿角盆地」と言う用語については、地理学・地質学等の学術論文に於いても「花輪盆地」と呼称しており、それに従うべきとする意見が多い。「花輪盆地」とは盆地の主邑「花輪」に由来するが、「鹿角」は、古代の「上津野」からの転化であり、その「上津野」とは、「米代川上流の平地」の意であり、地理的位置も表現できる用語であることから、あえて「鹿角盆地」とした。

(2) 古代史上の鹿角

鹿角地方が、古代史上に登場するのは、元慶2(878)年に律令体制に対する現地住民の不満が爆発し、律令体制の出先機関である秋田城・邑を攻め焼いた住民闘争に参戦した12カ村の1つ「上津野」としてである。

参戦した12カ村は『三代実録』に、上津野・火内・楢淵・野代・河北・腋本・方口・大河・^(註1)提・姉刀・方上・焼岡とあり、米代川上流から上津野・火内・楢淵・野代の順に並べられているのは、地理的位置を強く意識した記載となっている。この住民闘争を抑圧するために、律令中央政府から派遣された小野朝臣春風・坂上大宿弥好蔭等は、北上川を北上するように陸奥国を通過し、分水嶺から米代川沿いに下り、上津野に入って説得し、その後秋田の営に至っている。このことは、上津野が、陸奥・出羽両国を結ぶ交通路上にあり、古くから認識されていたことを物語っている。これを傍証するものに、地元で「古墳」と呼ばれている奈良・平安時代の墳丘墓があげられる。この「古墳」は、秋田県北部では鹿角盆地に確認されるのみであり、岩手県北西部の「古墳群」の影響を強く受けたものと解釈される。鹿角盆地内には、三光塚1号・2号、高田、石野、曲谷地A・B、枯草坂、申ヶ野の8カ所があげられるが、^(註3)三光塚1号・2号と申ヶ野を除くと、米代川・大湯川・小坂川の合流する地区の周辺に存在する。米代川・大湯川・小坂川を遡上し、分水嶺を越えると北上川・馬淵川・平川に連なることから、この合流地区は、^(註4)鹿角盆地の中でも極めて重要な位置を占めている。この地区は、近世の絵図(第2図)にもみられるように、米代川の氾濫原にあたり、肥沃な土地であったことがうかがわれる。鹿角盆地の中では、この地が早くから拓かれ、それに伴って自然堤防上に「古墳」が築造されたと考えられる。弘仁期に、邑良志間村の吉弥候部都留岐と貳薩体村の伊加古等が長い間争って^(註5)いたのは、この肥沃な上津野をめぐる^{こと}ではないかと考えられている程、要衝の地である。古代の土器のうち、奈良時代の所産と考えられる土器は、この地区の近くに見られ、平安時代の土器は、より南側に多く出土していることは、「開拓」の進捗を示すものとも思われる。



第1図 遺跡位置図

註

- 1 『三代実録』元慶2年7月10日条
- 2 曲谷地B遺跡は、別名泉森と呼ばれ、8世紀前後の直刀が出土している。泉森は、明治年間に蝦夷森を改称したものである。
- 3 柳沢清志「古代の鹿角」『鹿角市史』第1巻 1982年（昭和57年）
- 4 盛岡市中央公民館蔵『花輪通代官所絵図』（元文4年）の部分複写である。
- 5 『日本後紀』弘仁2年7月29日条



第2図 花輪通代官所御絵図〔元文4（1739）年〕
（部分）にみる古地形

（3） 鹿角盆地に於ける古代土器研究史抄

鹿角盆地における古代土器研究の第1歩となったのは、明治34年12月中旬に松の木在住の佐藤定吉氏が発見した枯草坂遺跡の「古墳」から出土した土器である。この土器は、毛馬内に帰省中の内藤湖南（虎次郎）博士が大正元年8月20日付の文に「斎部土器各種」と記されている。^{（註1）}明治34年から大正元年9月まで7回にわたり調査された枯草坂古墳の出土遺物の一部は、東京帝室博物館に寄贈陳列されていたが、その遺物に対し、高橋健自博士が考察を加えている。^{（註2）}土器に関しては、「陶器は小残片に過ぎざれども、其形など、知るべからざれども内に例の青海波の如き痕あるものあれば可なり、大いなるものありしなるべく土器も亦小残片なれば詳かならざれども石器時代遺物に類し、内1片は模様さへありて確かに石器時代のものなりとす。然れども是等陶器及土器残片は固より安全なると副葬せしにあらざりて最初より封土中に混在せしものなるべし、果たして、然らば、これらは、此のふんを築きし以前に破壊して遺棄せられ

しものならん」と記している。そしてこの古墳の築造年代と被葬者について触れ、「鹿角の地は元「上津野」と書し、三代実録元慶2年の条に見えれば、大和民族の拓殖が彼の地方に及びしは平安朝なるべく、随って単純に考ふれば此の古ふんは將に之を紀念すべき遺跡なるべく想はる。然れども元慶の比内地より彼の地方に入り込みし、純大和民族がなほ、玉の御統を着装しつゝありしとは思はれねば、これらの造物は、夙に大和民族に接触し熟化せるえぞ即ち俘囚の輩が、大和民族より受得たりしものにあらざるかと思はるゝなり。(中略)今回発見の勾玉、大分の類が古く彼等の手に伝はりしは蓋しかゝる關係に基きしものならんか。果して此の如くんば、これらの物を所持せしは、熟之夷中一方の長たりしものなるべく、大和民族の多くが頸玉など用ひざるに至り、しかも元慶より以前に於て彼れが死體を葬るに際し、邦人の風に倣ひ^{ママ}ふんを築きてこれらを副葬せしものならんか。要之、鹿角の地は、大和民族が公然正式に入り込みしは、藤原攝関の初世なれば、單に古ふんは大和民族の遺跡なりとの前提の下に此の地の古ふんを解釈せば、当時或はその以後のものと断ぜざるべからず、然れども勾玉の類が當時尚ほ、邦人の着装せしものとは想はれざるなり。是を以て余が、如上の^{ママ}仮設を以て是が解釈を試みたるに過ぎざるなり」と記している。『秋田県史考古編』^(註3)により、枯草坂遺跡から出土した土器が、土師器と須恵器の破片であつたことがわかる。

昭和4年10月に浅井末吉(小魚)氏が、1人の農夫から俗称菩提野原に竪穴らしいものがあることを聞いたのが発端となり、翌5年4月に浅井氏が5個の竪穴の分布を調べ、5月18日に木村善吉氏と共に、新たに7個の竪穴を発見し、2個の竪穴を発掘調査している。^(註4)その結果、竪穴の南方築土の中央部に「竈址」を検出し、第2号竪穴から33点、第3号竪穴から41点の土器片の出土をみた。第3号竪穴出土の底部土器片には「全面に木の葉の壓痕歴然たるものある一事」、「各号竪穴出土の土器片は焼成度概して弱く、色澤は外面赤褐色、内面灰色であつて、すべて無文ではあるが縦に全面に刷毛目様の細き擦痕を認めることが出来る。」としている。また、この遺跡について、「私は、竪穴遺跡一少くとも東北地方の一は、その由来するところアイヌ族にありとするものであるが、後代金属文化の流入と相前後して、大和民族が次第にアイヌ民族を駆逐しながら、或は竪穴を占據し、又は新たに土着して固有の生活を営むだ。更に、後世生活様式が一変するに及んで、全くこの竪穴生活を廃したものであらうと考えてゐる。」と記している。なお「竈址」という名称は木村善吉氏が仮命名したものであるが、古代の竪穴の付設物に対する用語として定着していることは、学史的に評価される。この調査において、古代の竪穴住居跡に竈址が付設されることが判明したことと、鹿角地方の土師器が図示されたことの意義は大きい。その後、昭和26年8月2日から3日間後藤守一氏が^(註5)大湯環状列石調査に関連して、火山灰層の比較検討のため、第9号竪穴を発掘調査した。「床面からは原形を考定しがたい鉄器残片と土器破片とを発見したし、(中略)土器片の中、これを接合して形をなした

ものもある。椀形のものであり、外形からいえば、関東地方の鬼高式に近似している。底に木葉文があり、その椀の1の内面には黒漆を一面に塗附している。これらの土器が奈良時代又はそれに接する飛鳥時代頃のものであることは問題がないだろう。」と結論している。竪穴と火山灰層の関係については、「(略) 火山灰層の堆積ができたのちに、腐植土層が20cm位の厚さに堆積した時に、この竪穴の掘鑿が行われたことになる。かくしてこの調査によって、21年の秋の調査の時から抱いてきた疑問、即ち火山灰層の堆積は奈良時代以後のことであるかもしれないということは根も葉もないことだということになった。」と結論づけ、所謂大湯浮石層が、「奈良時代より縄文式文化時代に近い年代の堆積」と考えている。この昭和26年の発掘調査は、鹿角盆地における考古学研究に大きな影響を与えたものであり、重要である。

昭和30年4月20日から2週間にわたって行われた小枝指七館遺跡の調査では、「須恵器片、土師器片が各館址の包含層および耕土層からかなり多量に得られ」ているが、館址と時期を異にするということで記載は省略されている。^(註6)

昭和30年代に倍賞三雄氏が、万谷野で土師器を発見している。倍賞氏の談話と考古学研究者からの倍賞三雄氏宛の書簡によれば、弥生式土器あるいは、関東地方の鬼高式の土師器、と土器の認識が変化しており、当時の古代土器研究の現状が推測できる。坏形・甕形・壺形の各器種がまとまって出土したのは、鹿角盆地では初めてのことであり特筆されよう。^(註7)

昭和44年から昭和52年まで、東北縦貫自動車道建設に伴う遺跡分布調査、大湯環状列石周辺遺跡の緊急分布調査^(註8)、鹿角大規模農道建設に伴う遺跡分布調査^(註9)、国営総合農地開発事業に伴う鹿角地区遺跡分布調査^(註10)、圃場整備に伴う遺跡分布調査^(註11)が実施され、古代の土器も「古墳期」、「平安時代」などと記されるようになった。

昭和47年8月3日から4日間実施された鹿角大規模農道遺跡分布調査では、餅野遺跡が、県立十和田高等学校社会科同好会によって発掘調査された。^(註12) 竪穴住居跡の埋土上部に大湯浮石層が凹レンズ状に堆積しており、竪穴内部から回転糸切り痕のある坏形土師器（内面黒色処理したものとしらないものがある。）篋起こし（あるいは篋削りか）した甕形土師器、木葉痕のある甕形土師器が出土している。この調査報告書で重要なのは、奥山潤氏の教示として竪穴住居跡埋土の上部に堆積する大湯浮石層に大湯浮石層特有の流紋岩の破片がないことから、第1次的降下物ではなく、竪穴の外にめぐらした土堤が廃棄後流れこんだものとの考えを示していることである。

昭和48年に実施された鹿角大規模農道遺跡分布調査では、丸館表遺跡^(註12)が発掘調査された。竪穴住居跡1棟が調査され、坏形土師器、甕形土師器、須恵器片が出土している。

昭和52年7月25日から13日間にわたり、大里勝蔵・庄内昭男両氏により発掘調査された鳥野遺跡^(註14)と源田平遺跡では、計3棟の竪穴住居跡が検出された。鳥野遺跡の第1号竪穴住居跡には

大湯浮石層が埋土中半に凹レンズ状に堆積し、かまどとその周辺から、甕形土師器・壺形土師器、内面を黒色処理した坏形土師器口縁部破片が出土している。

源田平遺跡では、大湯浮石層が竪穴住居跡の埋土の上方に堆積している。第1号竪穴住居跡からは、坏形土師器・坏形須恵器・甕形土師器が、第2号竪穴住居跡からは、回転糸切り痕のある坏形土師器と、甕形土師器・甕形須恵器が出土している。

調査者は、鳥野遺跡第1号竪穴住居跡の年代を8世紀後半の奈良時代末、源田平遺跡の2棟の竪穴住居跡は、10世紀後半から11世紀初めの平安時代後半と推定した。また、大湯浮石層の年代を10世紀後半以降、平安時代末と推定した。古代の遺物に具体的に年紀を与えたのは、鹿角盆地内では初めてのことであり、広範に分布のみられる大湯浮石層に対し、後藤守一氏が、「根も葉もないこと」と否定した奈良時代以後の年代を与えたことは注目される。

富樫泰時氏は、鳥野遺跡・源田平遺跡・菩提野竪穴遺跡の調査成果をもとに、各遺跡遺構への大湯浮石層の堆積状況及び出土遺物から、鳥野→源田平→菩提野という編年を組み立てた。^(註15) 鹿角盆地では初めての編年であり、土器型式編年と降下火山灰編年の相互協力による考古学編年は大いに注目され、この鳥野・源田平遺跡の調査成果と、富樫泰時氏の編年は、以後の年代観に大きな影響を与えた。

昭和52年10月3日から2週間実施された小平遺跡の発掘調査では、第4号竪穴住居跡から墨書された坏形土師器や、甕形土師器・坏形須恵器・甕形須恵器が出土した。^(註16) 坏形土師器は、底部に回転糸切り痕を残しているが、切り離し後、底辺部に削り調整したもの、内面に篋みがき調整を施し、黒色処理したもの、轆轤調整しただけの赤褐色の土器と3分類し、源田平遺跡の竪穴住居跡の出土土器よりは古く、10世紀に入った年代が考えられるとしている。

東北縦貫自動車道建設に伴う事前調査が、昭和54年から県教育委員会により大規模かつ長期にわたって実施された。古代の遺構・遺物を検出した遺跡は、歌内遺跡・飛鳥平遺跡・北の林^(註17) I遺跡・北の林II遺跡・上葛岡IV遺跡・駒林遺跡・一本杉遺跡・案内III遺跡・中の崎遺跡・妻の神I遺跡・孫右エ門館遺跡・案内I遺跡・妻の神II遺跡・下乳牛遺跡・はりま館遺跡・白長根館I遺跡・丑森遺跡の16遺跡である。^(註18) ^(註19) ^(註20) ^(註21) ^(註22) ^(註23) ^(註24) ^(註25) ^(註26) 鹿角市教育委員会も学校建設等の事前調査として、御休堂遺跡・新斗米館跡・高市向館遺跡・天戸森遺跡・下沢田遺跡の調査を実施した。^(註27) ^(註28) ^(註29) ^(註30) ^(註31) ^(註32)

また、県道建設に伴う案内IV遺跡・案内V遺跡の発掘調査が昭和57年・58年に実施された。

昭和54年から昭和58年までの5年間に古代の遺跡が23か所発掘調査されたことになり、調査に追われているためか、これらの報告書からは詳細な分析・考察は出現しなかった。

わずかに桜田が、大館・北秋田地方、青森県津軽地方の発掘調査成果と東北縦貫自動車道関係の発掘成果をもとに、米代川右岸から北方の津軽地方に底面に砂粒を付着させる甕形土師器が分布していることを、口頭発表したにすぎない。この発表は、恒常的に律令政府に隷属しな

かった、米代川以北・津軽地方の住民が生産・消費した甕形土師器に「地方型」が出現すること、砂粒の付着に数種が認められることを述べたものである。この甕形土師器は、古代の土器の出土例が少ないにもかかわらず、「大館地方に普遍的に出土する土器」と奥山潤・板橋範芳(註34)両氏が看破した土器であり、その分布範囲も、富樫泰時氏の「円筒土器文化圏の意味するもの」(註35)に論じられた範囲内に入るもので、新味はないが、広域火山灰と共に遺跡相互の比較研究時に1つの指標となり得る土器として注意を喚起した。

昭和57年には、『鹿角市史』第1巻が刊行され、鹿角市内各地から出土した遺物が図示された。(註36)昭和58年には、藤井安正氏が、「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」という標題で資料紹介をしている。(註37)この中で文様が描かれている甕形土器は、北海道および青森県の遺跡から出土する擦文土器に類似するもので、文様については擦文土器の影響を強く受けたものと推定している。鹿角盆地で出土した遺物と擦文土器の関係について言及した最初の文である。

庄内昭男氏は、『秋田考古学』38号に「鹿角地方の土師器」という標題で、鹿角市内の高市(本項では「万谷野」として扱っている。)・長野・源田平・上川原・高沢の各地から出土し、市内各所に保管されている11点の古代の土器を紹介し、8世紀後半から9世紀初頭という年代(註38)を与えている。

鹿角盆地における古代の土器に関する報告・論文で、土器の分類・編年に言及しているものは少なく、積極的に年代を記載しているのは庄内昭男・藤井安正両氏である。他は、年代決定に慎重なのか、あるいは決定根拠をもたないために消極的なのか、単に「平安時代」「桜井第II型式」「表杉ノ入式」に終始している。

註

1. 『猿賀神社縁由誌錦木塚其他遺跡誌綴り』の中に原本があり、これを昭和60年2月に複写した鹿角市立十和田図書館の蔵書による。
2. 錦木公民館編『昭和5年版曲田慶吉先生遺稿 錦木村郷土史』の「第12節枯草坂の古ふん発掘の次第」による。
3. 大和久震平・奈良修介著、秋田県編集『秋田県史考古編』 1977(昭和52年)
4. 木村善吉「陸中大湯町竪穴調査報告」『人類学雑誌』45巻9号 1930(昭和5年)
5. 後藤守一「菩提野の竪穴跡」『大湯町環状列石』埋蔵文化財発掘調査報告第二 文化財保護委員会 1953(昭和28年)
6. 江上波夫・関野雄「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』 1958(昭和33年)
7. a. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書一十和田町・小坂町地区一』秋田県文化財調査報告書第20集 1970(昭和45年)
b. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書一花輪町・尾去沢町・八幡平村地区一』秋田県文化財調査報告書第24号 1972(昭和47年)
c. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書一八幡平～十和田錦木一』

- 秋田県文化財調査報告書第56集 1978(昭和53年)
8. a. 秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』1974(昭和49年)
- b. 鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』鹿角市文化財調査資料6 1976(昭和51年)
- c. 富樫泰時『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書(昭和51年度)』鹿角市文化財調査資料7 1977(昭和52年)
9. a. 秋田県教育委員会『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集 1973(昭和48年)
- b. 秋田県教育委員会『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集 1974(昭和49年)
10. 秋田県教育委員会『国営総合農地開発事業鹿角地区遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 集 1977(昭和52年)
11. 秋田県教育委員会『圃場整備地域内(鹿角北東地区)遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第54集 1978(昭和53年)
12. a. 秋田県立十和田高等学校社会科同好会「餅野遺跡」『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集 1973(昭和48年)
- b. 奥山潤・大里勝蔵・菅原洋『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集 1974(昭和49年)
13. a. 奥山潤「丸館表遺跡」『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集 1973(昭和48年)
- b. 奥山潤・大里勝蔵・菅原洋『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集 1974(昭和49年)
14. 秋田県教育委員会『鳥野遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財報告書第49集 1978(昭和53年)
15. 富樫泰時「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん』19号 1978(昭和53年)
16. 鹿角市教育委員会『小平遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料第10号 1979(昭和54年)
17. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ—歌内遺跡—』秋田県文化財調査報告書第88集 1982(昭和57年)
18. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ—鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第89集 1982(昭和57年)
19. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ—北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡・上葛岡Ⅱ遺跡・小豆沢館遺跡—』秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57年)
20. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ—上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第91集 1982(昭和57年)
21. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ—猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第99集 1983(昭和58年)
22. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ—柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡—』秋田県文化財調査報告書第106集 1984(昭和59年)
23. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ—妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡—』秋田県文化財調査報告書第107集 1984(昭和59年)
24. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ—孫右エ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の

- 神II遺跡・下乳牛遺跡・西町I遺跡・西町II遺跡一』秋田県文化財調査報告書第119集 1984(昭和59年)
25. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X—はりま館遺跡・横館遺跡・大岱I遺跡一』秋田県文化財調査報告書第109集 1984(昭和59年)
26. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ—館平館I遺跡・館平館II遺跡・白長根館II遺跡・丑森遺跡・道合I遺跡・道合II遺跡・大岱II遺跡・大岱III遺跡・円川原遺跡・大岱IV遺跡一』秋田県文化財調査報告書第120集 1984(昭和59年)
27. 鹿角市教育委員会『御休堂遺跡』鹿角市文化財調査資料19 1984(昭和59年)
28. 鹿角市教育委員会『新斗米館跡—鹿角市新斗米館跡第II次発掘調査報告書一』鹿角市文化財調査資料16 1981(昭和56年)
29. 鹿角市教育委員会『高市向館発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22 1982(昭和57年)
30. 鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26 1984(昭和59年)
31. 鹿角市教育委員会『下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27 1984(昭和59年)
32. 秋田県教育委員会『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書—案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡一』秋田県文化財調査報告書第115集 1984(昭和59年)
33. 桜田隆「底面に砂粒を付着させる甕形土師器とその分布範囲について」『日本考古学協会第48回総会研究発表要旨』 1982(昭和57年)
34. a. 奥山潤・板橋範芳『粕田遺跡』大館市教育委員会 1974(昭和49年)
b. 門間光夫・板橋範芳『細越遺跡緊急発掘調査概報』比内町教育委員会 1976(昭和51年)
35. 富樫泰時「円筒土器文化圏の意味するもの」『北奥古代文化』第6号 1974(昭和49年)
36. 柳沢弘志「古代の鹿角」『鹿角市史』第1巻 1982(昭和57年)
37. 藤井安正「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」『考古風土記』第8号 1983(昭和58年)
38. 庄内昭男「鹿角地方の土師器」『秋田考古学』38号 1984(昭和59年)

2 鹿角盆地内各所出土土器群の様相

鹿角盆地内で発掘調査あるいは遺物が採集された古代の遺跡のうち、万谷野・鳥野・高市向館・下乳牛・一本杉・中の崎の6遺跡を対象とする。資料の選択にあたっては、遺構の一括遺物を取り上げ、同一時期としての土器組成を把握するよう努めたが、出土状況の明確で良好な資料は僅少なのが現状である。

古代の土器のうち、「平安時代」の土器の類型化については器形・製作技法による変化が大きいに着目し、「様式」の概念による土器の類型化を目的とし、各遺跡・各遺構内から出土した土器群を「ほぼ同時期に廃棄された土器の一群」として把握し、各遺跡・各遺構名をとって呼称することとした。^(註)

本論をまとめるにあたり、報告書に掲載された土器を実見させていただいたところ、いくつかの土器の成形方法・調整技法について報告者と見解を異にした。土器に対する「事実誤認」

か、「見解の相違」かの論争は別としても、基本的事項に対しては、詳細に観察すべきである。

古代の土器を多く出土し、資料的価値が極めて高いにもかかわらず、その出土状況、調整技法等が不明確なため、報告書の「実測図」が必要な情報を十分に提供していない。そのため、再観察・再実測が必要となる場合がある。

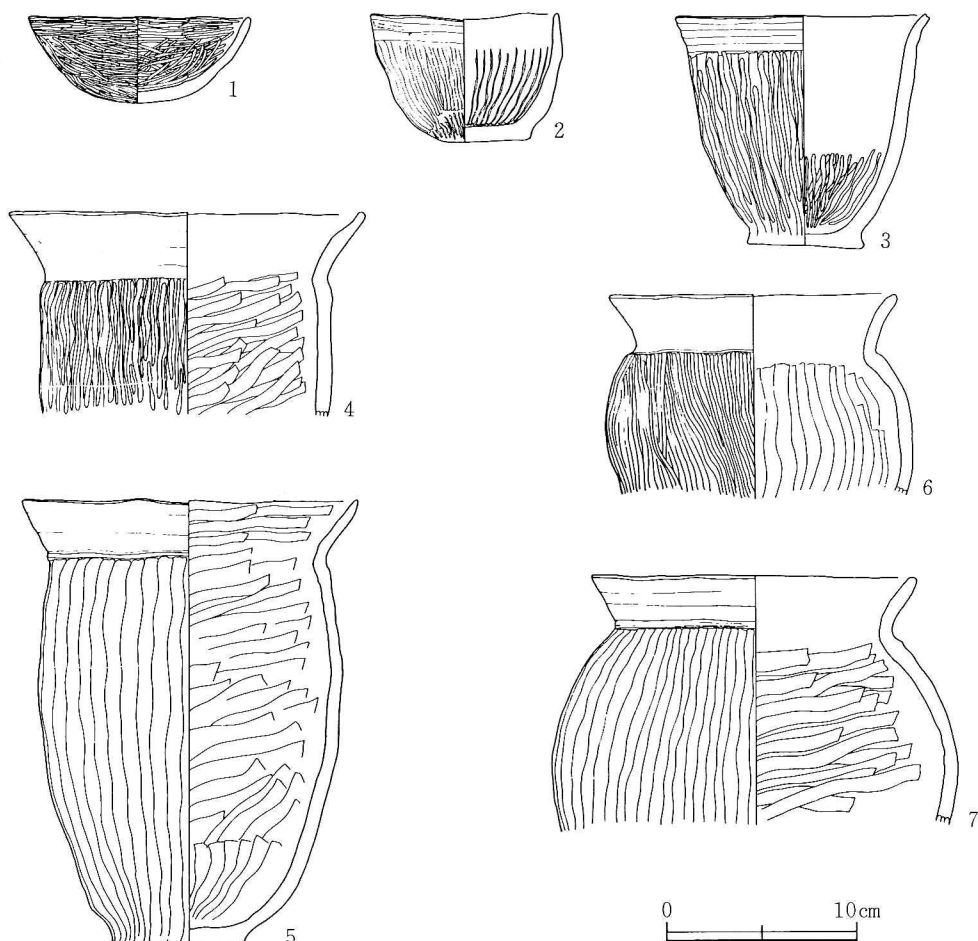
註 この方法は、安部実・佐藤庄一「庄内地方平安時代土器編年図」『新青渡遺跡第1次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983(昭和58年)を参考にした。

(1) ^{まんの}万谷野遺跡出土土器群 (第3図)

万谷野遺跡から出土した土器群は、正式な発掘調査で得られたものではない。しかし、所蔵者である倍賞三雄氏が採集されたもので、聞き取り調査の結果、1棟の竪穴住居跡、あるいは1基の竪穴遺構の中から採集したものと判断されることから、採集品ではあるが、資料の1つとして採用した。

本土器群は、既に『鹿角市史』第1巻に図示されているが、詳しい説明文が割愛されているので、説明を加えたい。また、庄内昭男氏により一部が『秋田考古学』38号に紹介されている。

1. 体部中央に両面から指で押圧して段を形成した痕跡を残す丸底の坏形土師器である。両面とも細かい篋磨き調整しているが、黒色処理を施していない。明褐色を呈する。口径11.2cm、高さ4.6cm。
2. 粘土紐巻き上げ痕を外面に残す甕形土師器である。両面とも口縁部指など、胴部篋などで調整されている。底部外面は平滑である。灰茶褐色を呈する。口径10.0cm、高さ6.9cm、底径4.7cm。
3. 口唇部を横方向に削るような篋なでをしている甕形土師器である。外面の口縁部は、横方向の篋なで、胴部は縦方向に篋なで後篋磨きして整形している。内面は、口縁部が指なで後部分的に篋磨きしており、以下は篋なで後、胴部下半から底部を放射状篋磨きしている。底部外面は平滑である。橙色を呈する。口径13.4cm、高さ12.1cm、底径5.1cm。
4. 胴下半部を欠失し、口縁部を大きく外傾する甕形土師器である。外面は、胴部に縦方向の細かい篋磨き整形がなされ、内面は、胴部が横方向に篋なでがなされている。茶褐色を呈する。口径18.8cm、現高10.6cm。
5. 頸部に弱い段をもち、口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。外面は胴部に縦方向の篋なで、頸部に横方向に削るような篋なでがなされている。内面は、全面篋なでがなされるが、胴部のなでは弱い。底部外面には、木葉の圧痕が認められる。茶褐色を呈する。



第3図 万谷野出土土器群実測図

口径17.5cm，高さ23.4cm，底径7.0cm。

6・7．胴部下半は欠失する壺形土師器である。球形の胴部と大きく外傾する口縁部との接合部の外面は，横方向にやや強く篋などでされている。胴部は，外面が細かい縦方向の篋などで，内面が6は縦方向に，7は横方向に弱い篋などがなされている。いずれも茶褐色を呈する。6は口径15.3cm，現高10.8cm，最大胴径16.3cm。7は口径17.0cm，現高13.1cm，最大胴径21.2cm。

いずれの土器も胎土に，径0.1cm～0.3cmの砂粒を含み，焼成良好で堅緻である。器面調整に篋磨きあるいは細かい篋などが多用され，成形時の卷上痕がほとんど認められない程，ていねいなつくりである。

万谷野遺跡では、丸底坏形・甕形(大・小)・壺形の3器種の土師器の組み合わせが認められる。

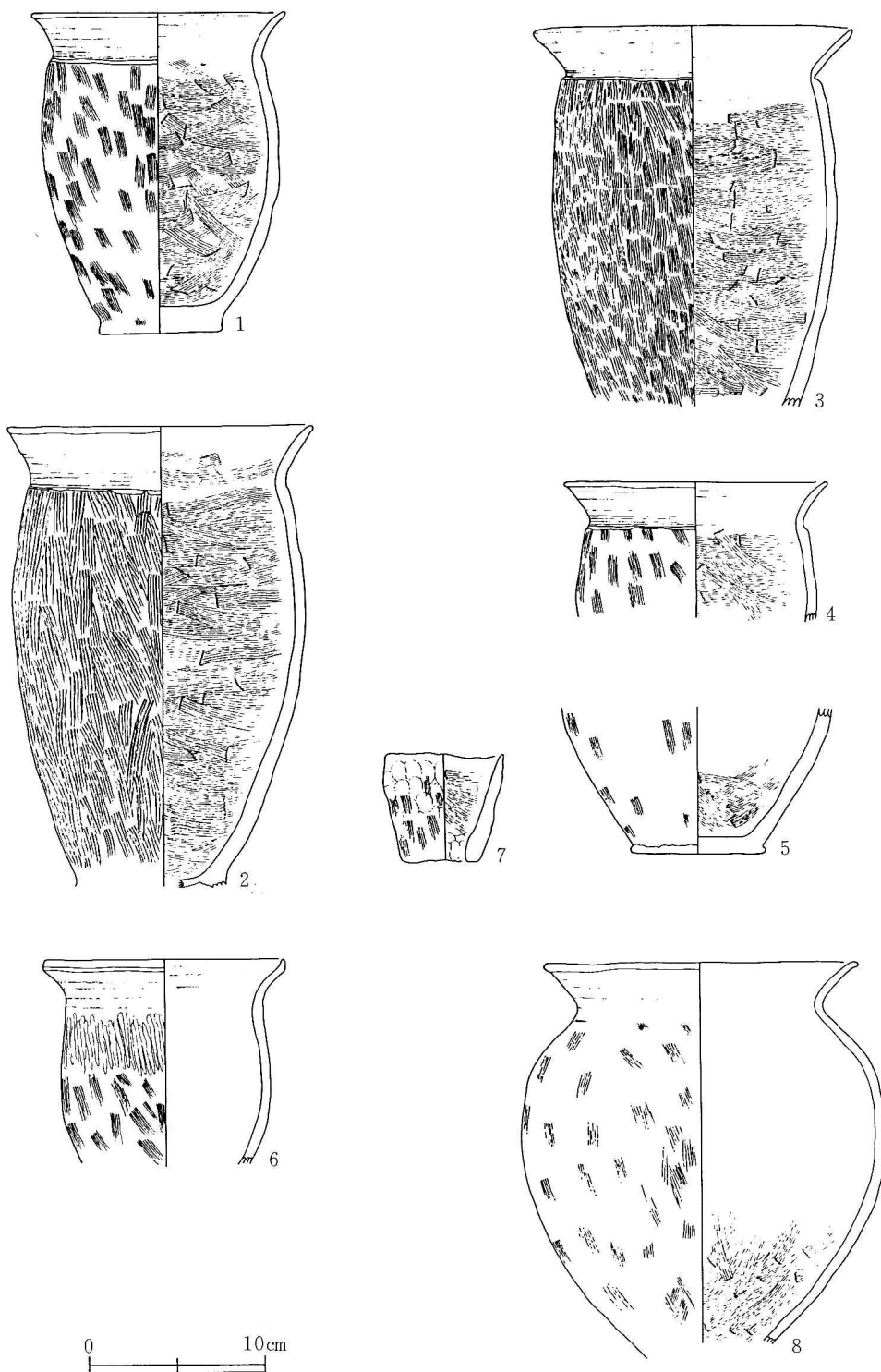
(2) ^{とりの}鳥野遺跡出土土器群 (第4・5図)

鳥野遺跡は、昭和52年に秋田県教育委員会が発掘調査を実施(担当者:大里勝蔵・庄内昭男)し、竪穴住居跡2棟(うち1棟は道路切り通し法面に露出)を調査し、7個体分の甕形土師器1個体分の壺形土師器、2個体分の甕形土師器や紡錘車等が得られた。しかし、坏形土師器はわずかに内面黒色処理された口縁部破片が出土したにすぎない。詳細は、報告書(秋田県教育委員会 昭和53年)を参照されたい。

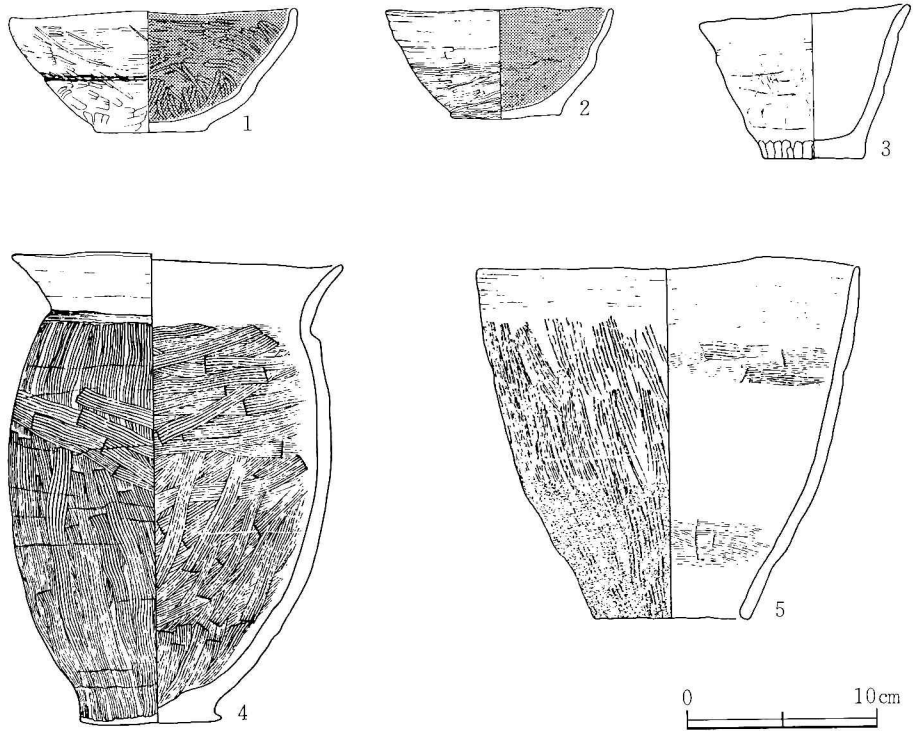
その後昭和56年に鳥野遺跡の土地所有者である安保カヨ氏が、耕作の障害となる黒土中の粒状火山灰層(大湯浮石層)を除去中、石組のかまどを発見し、これの撤去も企てて黒土の落ち込み(竪穴住居跡)を掘り下げ中、2個体の坏形土師器、2個体の甕形土師器(第5図1～4)と多数の破片を発見、保管していた。

1. 体部下半に両面から指で押圧して段を形成し、外面の上半部と内面を黒色処理した平底の坏形土師器である。両面とも細かい篋磨きがなされ、底部外面には篋なでがなされている。外面の下半は、にぶい黄橙色を呈する。口径15.1cm、高さ6.4cm、底径5.8cm。
2. 体部中央からやや上に内面から指で押圧して段を形成し、外面の口縁部分と内面を黒色処理した平底の坏形土師器である。外面は口縁部が指なで、段部分が横方向の篋なで、その下方が横方向の篋磨きがされている。内面は、全面篋磨きされている。底部外面には細かい篋なでがなされている。外面は口縁部を除き浅黄橙色を呈する。口径12.0cm、高さ5.9cm、底径5.8cm。
3. 頸部に段が形成され、粘土紐巻き上げ痕が外面に残る甕形土師器である。外面の胴部には、楕円形の凹みが多く認められることから、紐巻き上げ後、内面から器壁を指頭で押圧した痕跡と思われる。この後、篋なでされている。底辺部は篋削りされている。内面は指でなでられているが粗い。底部外面は篋なでされている。橙色～にぶい褐色を呈する。口径11.1cm、高さ8.1cm、底径5.4cm。
4. 頸部に段が形成され、口縁部が大きく外反する甕形土師器である。粘土紐巻き上げにより形成され、胴部は両面に縦方向(一部横方向)に篋なで(所謂「刷毛目状痕」)を呈するがなされている。底部外面は篋なでされている。橙色～にぶい黄橙色を呈する。口径17.6cm、高さ25.1cm、底径7.3cm。

鳥野遺跡の県教委調査時出土土器と安保カヨ氏発見土器は、甕形土師器の底部外面の木葉痕と篋なでの差異はあるものの他の器形的特徴、調整技法に差異を認めないことから、出土遺構



第4図 鳥野遺跡竪穴住居跡出土土器群実測図(1)



第5図 鳥野遺跡竪穴住居跡出土土器群実測図(2)

こそ違い、ほぼ同一時期のものと見なすことができる。第4図6の甕形土師器は、口縁部のつくり方のちがい、胴部上半の縦方向の篋磨きがなされるなど、他の甕形土器とは差異があるが第4図1・2と同じ出土状態であり、同時期の所産とすべきであろう。

器種構成は、平底内黒環形・甕形（大・中・小）・壺形・甑形（大・小）の4種である。

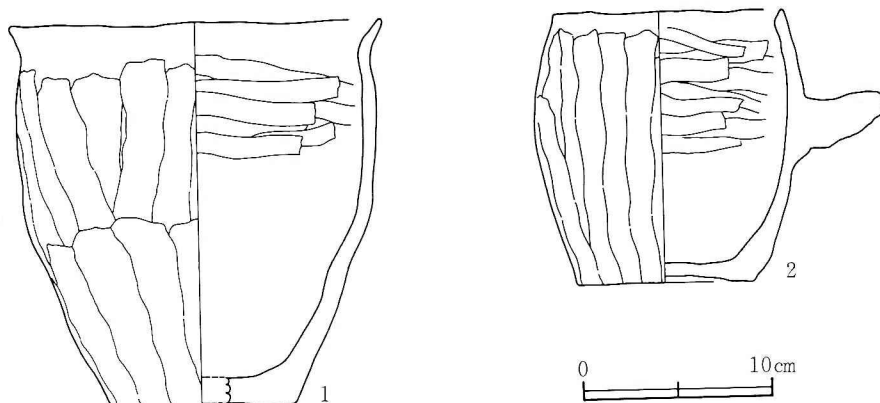
(3) ^{たかいちむかいだて}高市向館跡出土土器群（第6・7図）

高市向館跡は、鹿角市立花輪第二中学校建設に伴い、昭和56年に鹿角市教育委員会（担当：秋元信夫）が発掘調査を行ない、昭和58年に報告書が刊行された。

第10号竪穴住居跡出土土器群（第6図）

かまど内から出土したものである。

1. 口縁部が強く外傾する甕形土師器で、外面を粗い篋削り、内面の上半を篋などで調整した



第6図 高市向館跡第10号竪穴住居跡出土土器群実測図

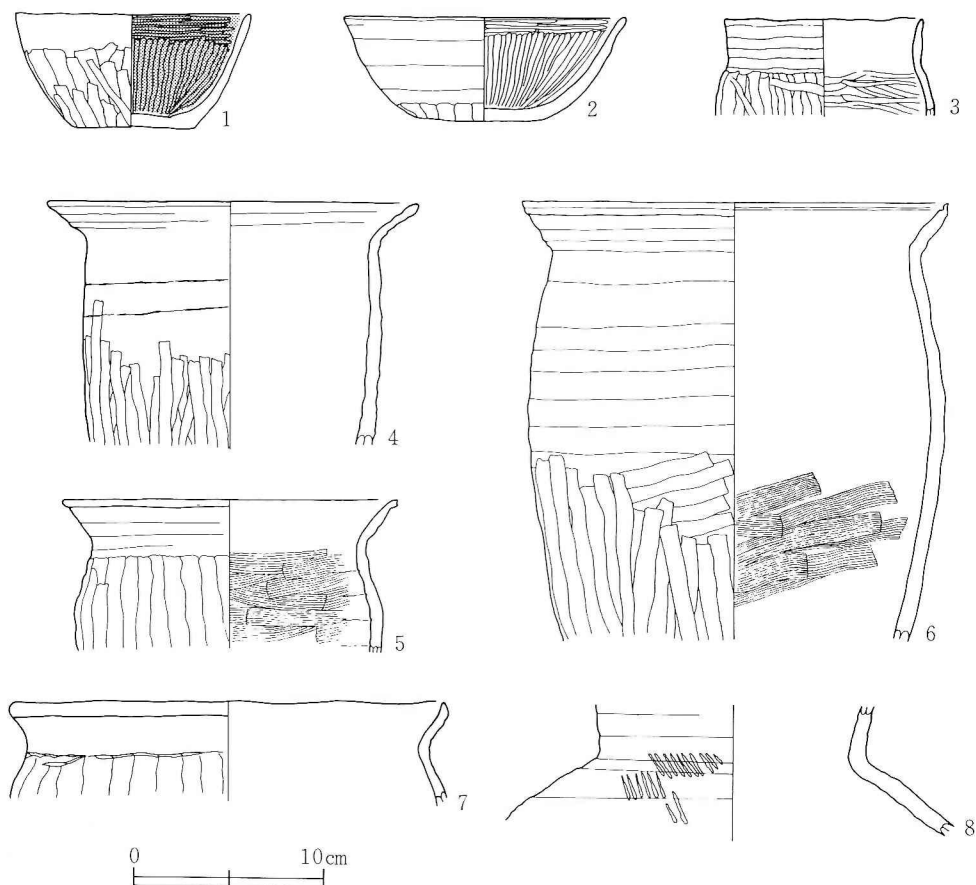
ものである。暗褐色を呈する。口径19.5cm、高さ20cm、底径9.6cm。

2. 胴張りが強く、口縁部内側を横方向に篦削りして口唇部をつくり出した甕形土師器で、胴部中半に把手が付けられている。胴部外面を篦削り、内面上半を篦で調整している。褐色～暗褐色を呈する。口径12cm、高さ14.3cm、底径9.4cm。

第31号竪穴住居跡出土土器群 (第7図)

第31号竪穴住居跡は、自然営力による堆積を示す埋土の上半分に粒状火山灰（大湯浮石層）が厚く堆積しており、土器は、下半の埋土中、かまどの中からの出土である。

1. 轆轤から静止糸切り技法により切り離されたあと、体部外面が縦方向に細かい篦削りされ、更に篦でなされている坏形土師器である。内面は、篦磨き後黒色処理されている。外面は、橙色～茶褐色を呈する。口径12.5cm、高さ6.0cm、底径6.3cm。
2. 報告書では、「2は、ロクロ成形後、回転ヘラケズリを施したもので、底面に回転糸切り痕がみられる」と説明され実測図では底辺部手持ち篦削りの表現がなされた土器である。轆轤から回転糸切り技法で切り離された後、底辺部を縦方向の手持ち篦削りした、坏形土師器である。内面には、細かいいねいな篦磨きがなされているが、黒色処理はされていない。橙色～茶褐色を呈する。口径15.0cm、高さ6.0cm、底径6.5cm。
3. 胴部上半の残存する甕形土師器である。口縁部がほぼ垂直に立ち上っている。胴部は両面篦でなされている。明灰茶褐色を呈する。口径10.6cm、現高5.1cm。
4. 報告書では、「4は、ロクロ成形後、胴部にヘラナデを行なう長胴のもので、口縁部はやや強く外反する。」と説明された甕形土師器であるが、粘土紐巻き上げ痕が認められる。口縁部が大きく外傾し、胴部は縦方向に篦でなされている。茶褐色を呈する。口径19.6cm



第7図 高市向館跡第31号竪穴住居跡出土土器群実測図

現高12.8cm。

5. 胴部内面に粘土紐巻き上げの痕跡が認められ、横方向に篋削りされた口唇をもつ。口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。胴部外面には縦方向の篋などで、内面には横方向の篋などで（所謂「刷毛目状痕」を呈する）がなされている。暗褐色を呈する。
6. 報告書では、「ロクロ成形後、胴部外面にヘラナデ、内面に刷毛目調整を施したもので頸部で「く」の字状に外反し、口縁部でさらに直立する形態を呈し、胴部の張りの少ない長胴のものである。」と説明された甕形土師器である。大きく外傾する口縁部の口唇内側に横方向に1条の沈線を巡らし、内側を削りとることにより、口唇部が直立するように見える。胴部下半は、横方向の篋削りをした後、縦方向に篋などでしている。内面は、部分的に横方向の篋などで（所謂「刷毛目状痕」を呈する）がなされている。やや暗褐色～明褐色を呈する。口径22.5cm、現高23.0cm。

7. 口縁部が外傾し、口唇部で立ち上る甕形土師器である。頸部には、粘土のたまりが見られる。胴部外面には縦方向の篋などがなされている。やや暗褐色～明褐色を呈する。

口径22.4cm、現高5.5cm。

8. 壺形須恵器の頸部から肩部にかけての破片である。肩部に所謂「平行叩き目」が認められる。対応する内面には「当て具痕」等は認められない。現高6.9cm。

いずれの土器も焼成良好で堅緻なつくりである。やや濃い茶褐色を呈する土師器が多い。

高市向館跡第31号竪穴住居跡の土器は、轆轤使用坏形土師器・甕形土師器・壺形須恵器の3器種によって構成されている。

(4) ^{しもちうし}下乳牛遺跡出土土器群 (第8・9・10図)

下乳牛遺跡は、東北縦貫自動車道建設に伴い、昭和55年に県教育委員会(担当:熊谷太郎)が発掘調査を行ない、昭和59年に報告書が刊行された。

第1号竪穴住居跡出土土器群 (第8・9図)

粒状火山灰(大湯浮石層)が埋土中に凹レンズ状に厚く堆積する竪穴住居跡の1隅の床面上あるいは床面に敷かれた炭化板材上から、坏形土師器が重なり合うなどして集中出土した。

報告書では、37個体の坏形土師器、2個体の坏形須恵器、3個体の甕形土師器、1個体の鍋形土師器の他、石帯・櫛・皿形木製品が図示されている。また、土器観察表では、図示された37個体の坏形土師器全てが底部篋削りされ、そのうち3点が内面篋磨き・黒色処理され、4点が内面篋磨きされていると説明されている。色調は、浅黄橙色・灰白色・橙色・褐灰色・黄橙色・灰黄褐色・黒褐色・明褐色などを呈するとされている。

本稿では、36個体の坏形土師器を整形技法の違いなどにより6大別10細分した。

A. 轆轤から回転糸切り技法で切り離し、内面を篋磨き後、黒色処理した土器(1～3)

A-1 切り離した後、底辺部に手持ち篋削り調整した土器(1)

A-2 切り離した後、外面に何ら調整を加えない土器(2・3)

B. 轆轤から回転糸切り技法で切り離し、内面を篋磨きした土器(4～7)

B-1 切り離した後、底辺部に手持ち篋削り調整した土器(4)

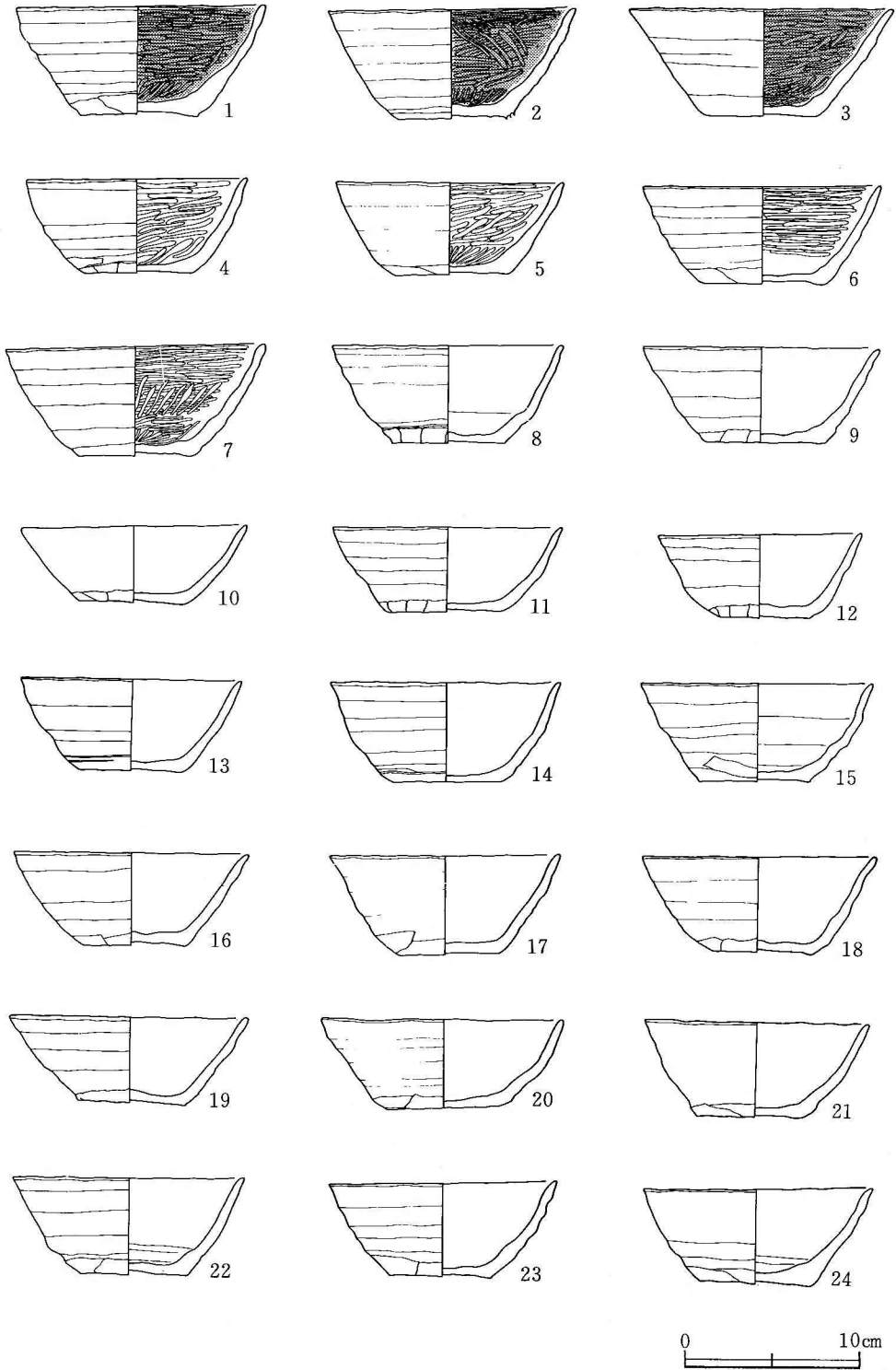
B-2 切り離した後、底辺部を回転篋削り調整した土器(5・6)

B-3 切り離した後、外面に何ら調整を加えない土器(7)

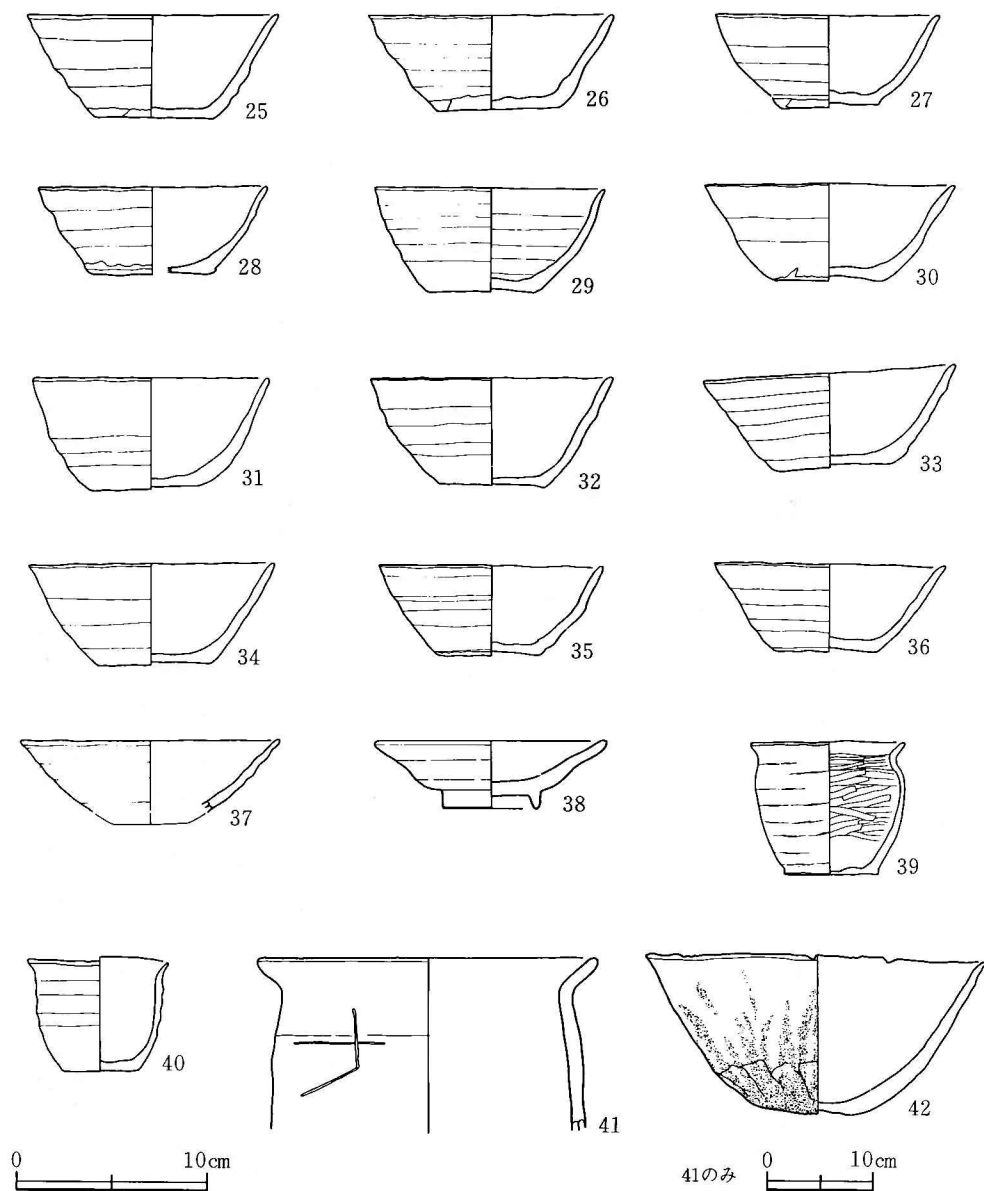
C. 轆轤から回転糸切り技法で切り離し、底辺部に手持ち篋削り調整を加えた土器(8～12)

D. 轆轤から回転糸切り技法で切り離し、底辺部に回転篋削り調整を加えた土器(13～27)

E. 体部の外面のみに回転篋などで調整が加えられ、轆轤から回転糸切り技法で切り離された土器(28・29)



第8図 下乳牛遺跡第1号竪穴住居跡出土土器群実測図(1)



第9図 下乳牛遺跡第1号竪穴住居跡出土土器群実測図(2)

F. 轆轤から回転糸切り技法で切り離され、何ら調整の加えられない土器 (30~36)

F-1 内面に黒斑の付く土器 (30~32)

F-2 内・外面とも黒斑の付かない土器 (33~36)

F-1・F-2は、器面に残る黒斑の有無が所謂「あかやき土器」の分別基準の1つになっていることから細分の1つに加えたものである。

(6・8・14・18・26・36)と(19・20・23・32)は、重なり合って出土した土器である。

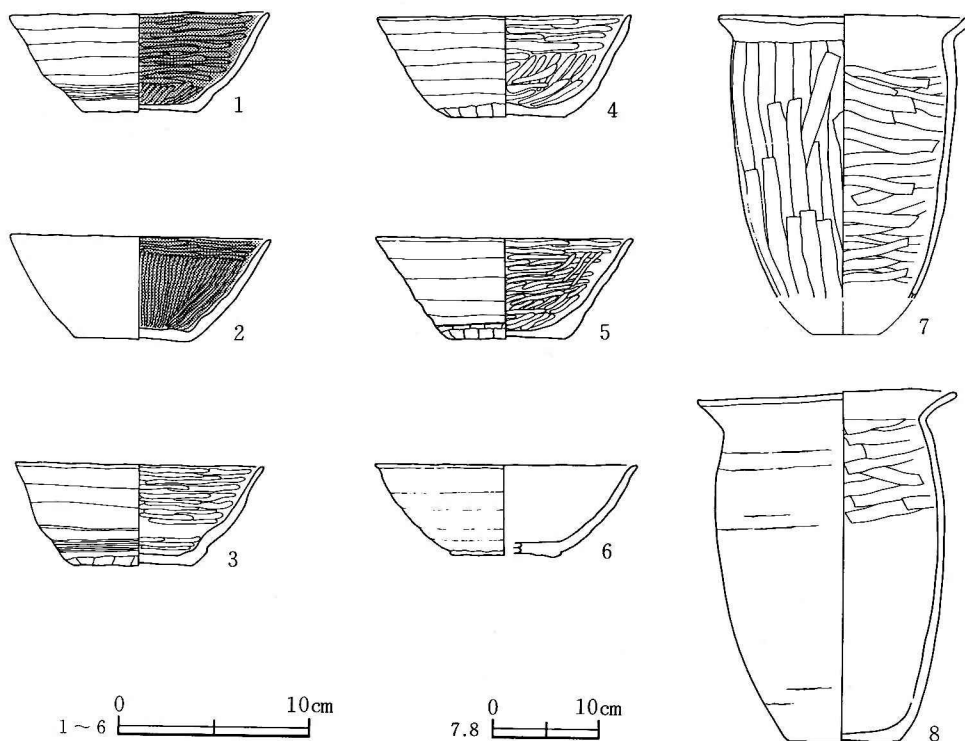
これら2つの重なり合った土器群を観察すると、内面を黒色処理した土器はどちらにも含まれていない。また(19・20・23・32)グループには、内面を篋磨き調整した土器、手持ち篋削りした土器は含まれていない。

坏形須恵器は2点(37・38)出土している。38は高台を付している。

甕形土師器は3点(39~41)出土している。39は、口径に比して底径が大きく、その外面に成形時の粘土紐巻上げ痕が明瞭に残る小型甕で、内面は篋などでされている。底部外面は平滑である。40は、轆轤上で製作された小型甕で、回転糸切り技法により切り離されている。胎土に砂粒が多く含まれている。41は、胴部下半を欠失する。篋などでされている上半部に篋書が認められる。42は、かまどに設置されたまま廃棄され、燃焼部内で出土した鍋形土師器である。胎土に砂粒を多量に含み、底辺部を篋削りしている。外面に赤変部分が認められる。

下乳牛遺跡第1号竪穴住居跡出土土器群は、坏形・甕形(大・小)・鍋形土師器と坏形・蓋形須恵器の5器種で構成されている。

第2号竪穴住居跡出土土器群 (第10図)



第10図 下乳牛遺跡第2号竪穴住居跡出土土器群実測図

報告書では、坏形土師器15個体、坏形須恵器1個体、甕形土師器7個体が図示されている。坏形土師器のうち10個体は、洗浄時に刷毛で強くこすったため、器表が磨滅しており、そのま

までは、「回転糸切り後、何ら調整を加えていないタイプ」になるが、調整が不明のための割愛した。また甕形土師器については、その出土状況から割愛した。

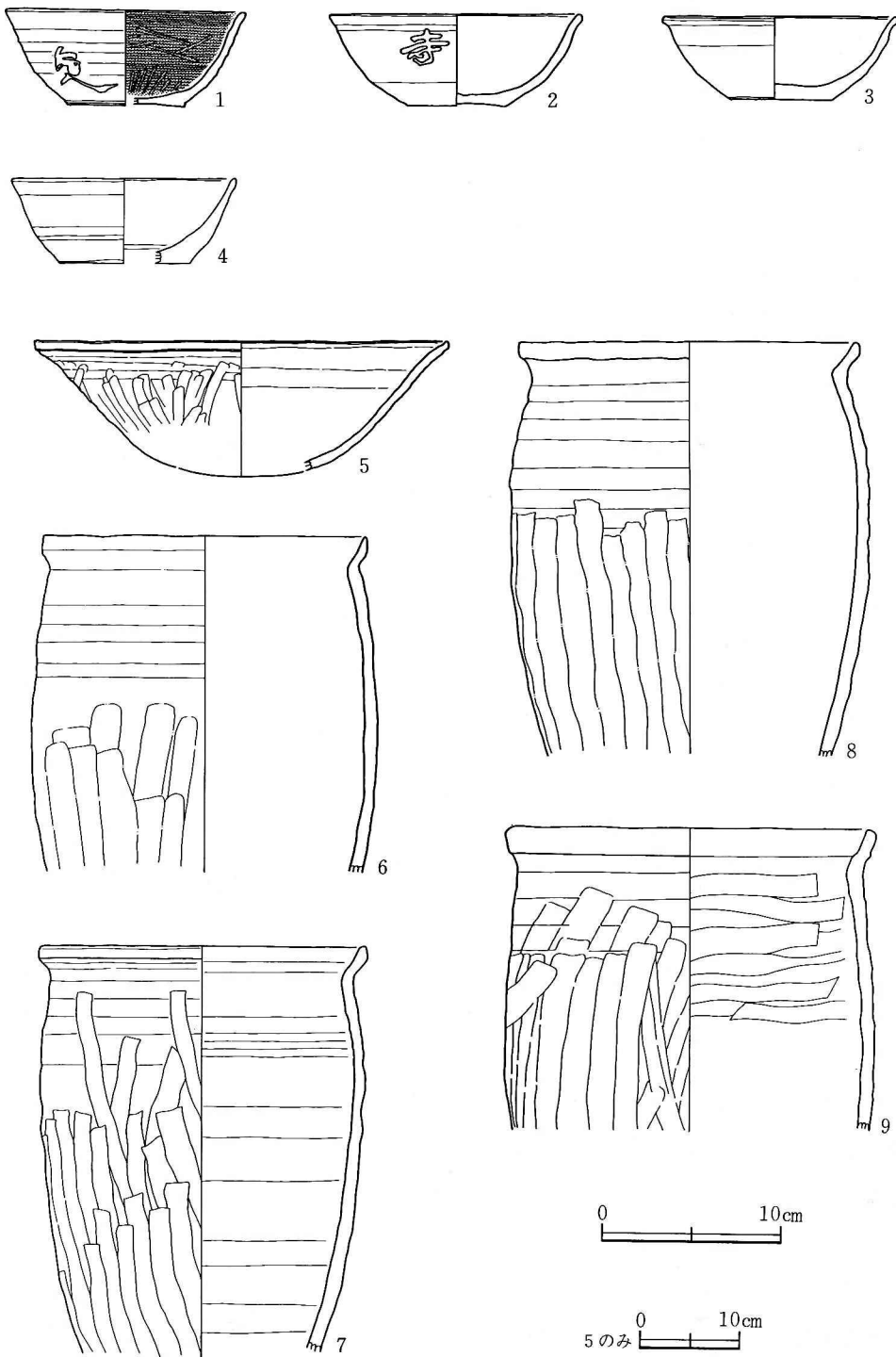
1. 回転糸切り技法により轆轤から切り離したあと、外面を回転篋などで調整した坏形土師器である。内面は篋磨きのあと黒色処理している。灰白色を呈する。口径13.7cm、高さ5.3cm、底径6.1cm。
2. 粘土紐巻き上げ後、轆轤の回転を利用して整形したと観察される坏形土師器である。回転糸切り後、底部外面の周縁を幅約0.5cmでドーナツ状に篋などでしている。内面を、篋磨き後黒色処理している。橙色を呈する。口径13.7cm、高さ5.5cm、底径5.9cm。
3. 外面上半を篋などで、下半を回転篋削り、底辺部を手持ち篋削りしている坏形土師器である。回転糸切り技法で切り離されている。内面を横方向の篋磨き調整しているが、黒色処理はしていない。灰黄褐色を呈する。口径13.0cm、高さ5.0cm、底径6.1cm。
4. 外面を篋などでし、底辺部を手持ち篋削りしている坏形土師器である。回転糸切り技法で轆轤から切り離している。内面を篋磨き調整しているが、黒色処理はしていない。褐灰色を呈する。口径13.5cm、高さ5.5cm、底径6.2cm。
5. 回転糸切り後、手持ち篋削りした坏形土師器である。内面を篋磨き調整しているが、黒色処理はしていない。灰褐色を呈する。口径13.6cm、高さ5.3cm、底径6.0cm。
6. 回転糸切り技法により轆轤から切り離された坏形須恵器である。灰オリーブ色を呈する。口径13.8cm、高さ4.9cm、底径5.9cm。
7. 口縁部が外傾し、口唇部が若干立ち上る。また、胴部外面を全面縦方向に篋削り調整し内面を横方向に軽い篋などでした甕形土師器である。褐灰色～にぶい橙色を呈する。口径22.6cm、現高26.1cm。
8. 粘土紐巻き上げにより成形されたもので、口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。内面胴部上半は横方向の篋などがなされている。浅黄橙色を呈する。口径20.6cm、高さ32.6cm、底径10.6cm。

下乳牛遺跡第2号竪穴住居跡出土土器群の土器構成は、坏形土師器、坏形須恵器、甕形土師器の3器種の組み合わせである。坏形土師器は、その調整方法から2大別できる。ただし、上述の割愛したタイプがもし生きるとすれば、3タイプに大別できることになる。

(5) ^{いっぽんすぎ}一本杉遺跡出土土器群 (第11・12・13図)

一本杉遺跡は、東北縦貫自動車道建設に伴い、昭和56年に県教育委員会(担当:桜田)が発掘調査を行ない、昭和58年に報告書が刊行された。

第13号竪穴住居跡出土土器群 (第11・12図)



第11図 一本杉遺跡第13号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)

第13号竪穴住居跡は、粒状火山灰（大湯浮石層）が、所謂「霜降り状」に含まれる黒褐色土層に覆われているが、床面を灰・炭化物・焼土が厚く堆積する焼失家屋である。

図化できた土器は、坏形土師器3点、坏形須恵器1点、鍋形土師器1点、甕形土師器8点の計13点である。坏形土器はいずれも回転糸切り技法により轆轤から切り離されているが、坏形土師器は器壁が湾曲し半円形に近い形状を呈するのに対し、坏形須恵器は直線的で逆台形に近い形を呈する。

1. 轆轤から切り離した後、内面を篋磨きし黒色処理している。外面体部に墨書が認められる。にぶい黄橙色を呈する。口径13.3cm、高さ5.3cm、底径6.5cm。埋土中から出土した。
2. 切り離し後の調整の痕跡が認められないが、外面体部上半に、「寺」の墨書が認められる。黒褐色を呈する。口径14cm、高さ5.2cm、底径5.4cm。かまど中から出土した。
3. 切り離し後の調整の痕跡が認められない。灰黄褐色を呈する。口径12.9cm、高さ4.7cm、底径5.7cm。かまど中と埋土中から出土した破片が接合した。
4. 切り離し後の調整の痕跡が認められない。橙色を呈するが、胎土・焼成から須恵器と判断した。口径12.4cm、高さ4.7cm、底径7.3cm。埋土中から出土した。
5. 丸底を呈すると推定される鍋形土師器である。外面の体部下半を篋削り、内面を篋で調整している。にぶい黄橙色を呈し、胎土に粗砂が混入している。口径40.7cm、現高12.7cm。かまど中から出土した。

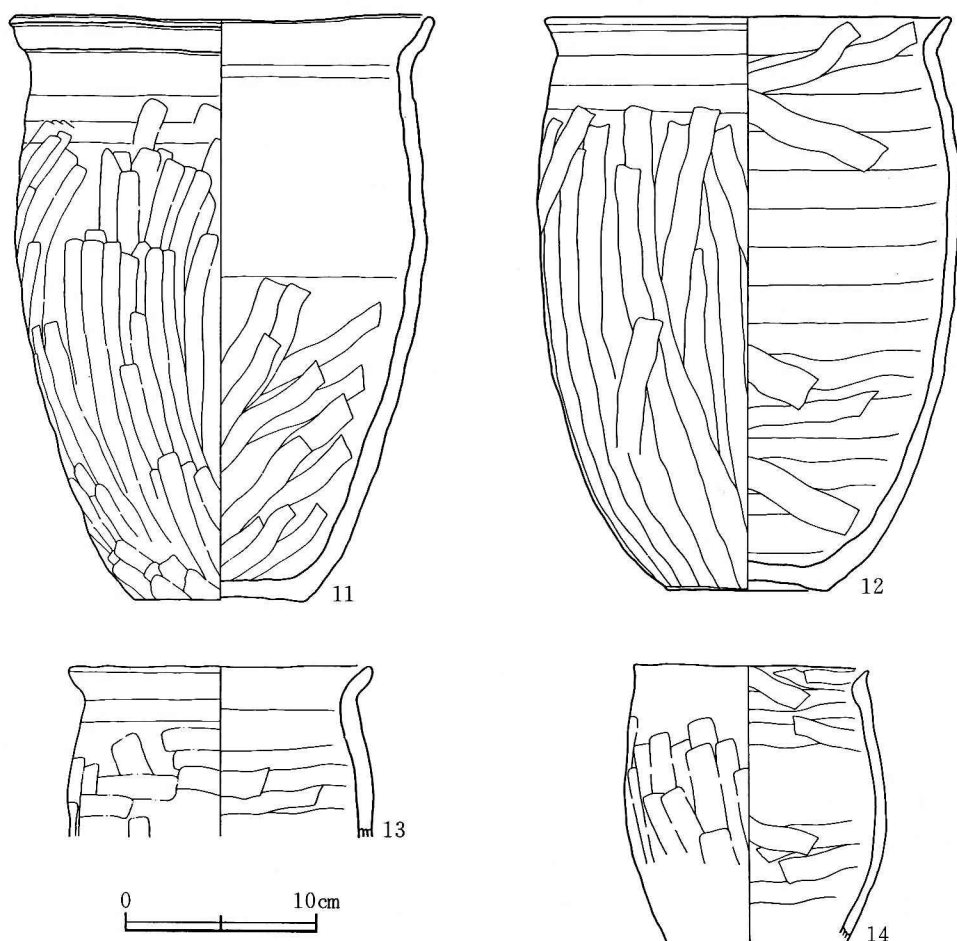
8点の甕形土師器は、口縁部形状により、4分類できる。

- 1類 短い口縁部が大きく外傾したあと、直立気味に立ち上る類（6・7・8）
- 2類 短い口縁部が小さく外傾したあと、緩やかに立ち上る類（9・10）
- 3類 短い口縁部が大きく外傾する類（11・12）
- 4類 口縁部分の器壁が厚く、短い口縁部が外反する類（13）

（1類・2類は、「弱いS字状口縁を呈する」という観点では、同類とみなすことも可能である。）

成形後の調整を観察すると、6～11は、外面の上半は、轆轤または回転台上で横方向になで（所謂水挽き）られ、下半は、篋削りしている。内面は横方向に篋でしている。12・13は、内・外面とも篋でされている。いずれも胎土に粗砂が混入している。

6. 浅黄色を呈する。口径17.8cm、現高18.7cm。かまど中と埋土中から出土した破片の接合。
7. 淡橙色を呈する。口径18cm、現高22.5cm。埋土中からの出土である。
8. 灰白色を呈する。口径18.6cm、現高22.9cm。埋土中からの出土である。
9. にぶい黄橙色を呈する。口径19.7cm、現高16.7cm。埋土中からの出土である。
10. 明褐色を呈する。口径19.2cm、高さ27.3cm、底径7.8cm。底部外面は平滑である。埋土



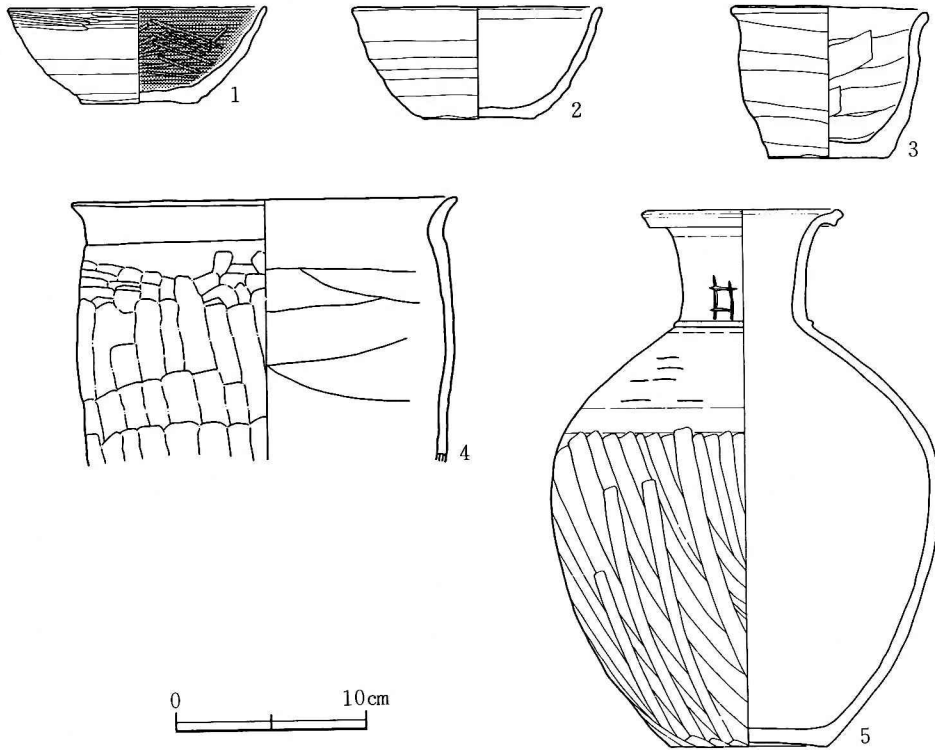
第12図 一本杉遺跡第13号竪穴住居跡出土土器群実測図 (2)

中からの出土である。 11. 胴張りが強く、灰白色を呈する。口径21.2cm, 高さ30.1cm, 底径8.4cm。砂粒が、底部外面の縁辺にドーナツ状に付着している。かまど中と埋土中及び第16号竪穴住居跡床面出土土器片と接合している。 12. にぶい橙色を呈する。口径15.5cm, 現高9.0cm。埋土中からの出土である。 13. 胴張りが強く、灰黄褐色を呈する。口径12.3cm, 現高14.3cm。かまど中からの出土である。

一本杉遺跡第13号竪穴住居跡の土器は、坏形（土師器・須恵器）鍋形・甕形（大小）の3器種で構成されている。

第14号竪穴住居跡出土土器群（第13図）

第14号竪穴住居跡は、粒状火山灰（大湯浮石層）が、黒褐色土に所謂「霜降り」状に含まれている土層に覆われていた。図化できた土器は、坏形土師器2点、甕形土師器2点、長頸壺形須恵器1点の計5点である。



第13図 一本杉遺跡第14号竪穴住居跡出土土器群実測図

1. 回転糸切り技法により轆轤から切り離された坏形土師器である。外面の口辺と内面全面を篋磨きし、その後、内面を黒色処理している。口径13.4cm、高さ5cm、底径6cm。にぶい黄橙色を呈する。かまど中から出土した。
2. 轆轤から回転糸切り技法によって切り離した後、何ら調整を加えていない坏形土師器で灰白色を呈する。口径13cm、高さ5.8cm、底径5.7cm。床面上に出土した。
3. 轆轤から回転糸切り技法によって切り離された小型の甕形土師器である。外面を横方向の篋削り、内面を横方向の篋なでをしている。にぶい黄橙色を呈する。口径10.2cm、高さ7.9cm、底径6.1cm。
4. 短い口頸部がわずかに外反し、胴下半を欠失する甕形土師器である。外面を細かく篋削りし、内面を篋なでしている。褐灰色を呈する。口径20.2cm、現高13.6cm。床面上に出土した。
5. 頸部に断面半円形の隆帯を1条巡らした長頸壺形須恵器である。頸部に所謂「篋書き記号」がある。轆轤から切り離し後、胴下半を篋削りしている。底部外面の全面には、砂粒が付着している。褐色を呈する。口径9.8cm、高さ28.1cm、底径8.2cm。かまど左側の

床面上から出土した。

第14号竪穴住居跡では、坏形、甕形、壺形の3器種の組み合わせが認められる。

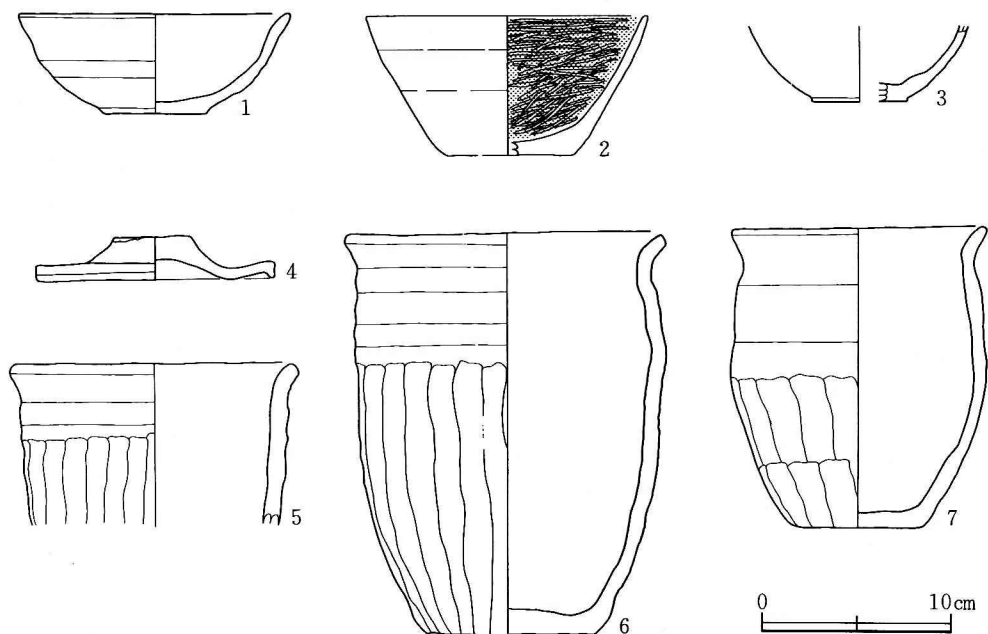
(6) 中の崎遺跡出土土器群 (第14・15・16・17・18図)

中の崎遺跡は、東北縦貫自動車道建設に伴い、昭和55年と昭和56年の2カ年にわたって、県教育委員会(担当:橋本高史)が発掘調査を行ない、昭和59年に報告書が刊行された。

第1号竪穴住居跡出土土器群 (第14図)

本竪穴住居跡は、かまどの構築土中に粒状火山灰(大湯浮石層)が混入していることから、大湯浮石層の堆積後に構築されたものであることが判明している。また、焼土・炭化板材等が多量に床面上あるいは壁面に沿って建てられた状況で出土しており、所謂焼失家屋である。

報告書には、11個体の土器が図示されているが、本稿では7個体の土器を図示・説明する。



第14図 中の崎遺跡第1号竪穴住居跡出土土器群実測図

1. 轆轤から回転糸切り技法により切り離された後、何らの調整も加えられていない坏形土師器である。にぶい橙色を呈する。口径14cm、高さ5.3cm、底径5.2cm。床面上から出土した。
2. 轆轤から回転糸切り技法により切り離した後、内面にアトランダムな篋磨きをし、黒色処理した、やや器高の高い坏形土師器である。胎土に粗砂が混入している。口径15cm、高さ7.5cm、底径6.8cm。床面上から出土した。

3. 轆轤から回転糸切り技法により切り離された後、何らの調整も加えられていない坏形土師器の破片である。にぶい橙色を呈する。底径5cm, 現高4cm。埋土中から出土した。
4. 轆轤から回転糸切り技法により切り離された後、糸切り痕跡をそのまま残し、つまみをつけない蓋形須恵器である。青灰色を呈する。口径12.4cm, 高さ2.3cm, 底径4.1cm。埋土中からの出土である。
5. 短い口頸部が外反する甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし）、下半を篋削りしている。小礫を含む器壁は厚く、口唇部までの厚さは、ほとんど変化しない。にぶい黄褐色を呈する。口径14.4cm, 現高8.2cm。かまど中から出土した。
6. 頸部が直立したあと、短い口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし）下半を篋削りしている。小礫を含む器壁は厚く、口唇部までの厚さはほとんど変化しない。底部外面は、平滑である。にぶい黄褐色～褐灰色を呈する。口径16.9cm, 高さ21.1cm, 底径8.8cm。かまど中から出土した。
7. 短い口縁部が大きく外傾し、胴張りのある甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし）、下半を篋削りしている。底部外面は平滑で胎土に礫を混入する。浅黄橙色を呈する。口径13.4cm, 器高15.6cm, 底径7cm。かまど中から出土した。

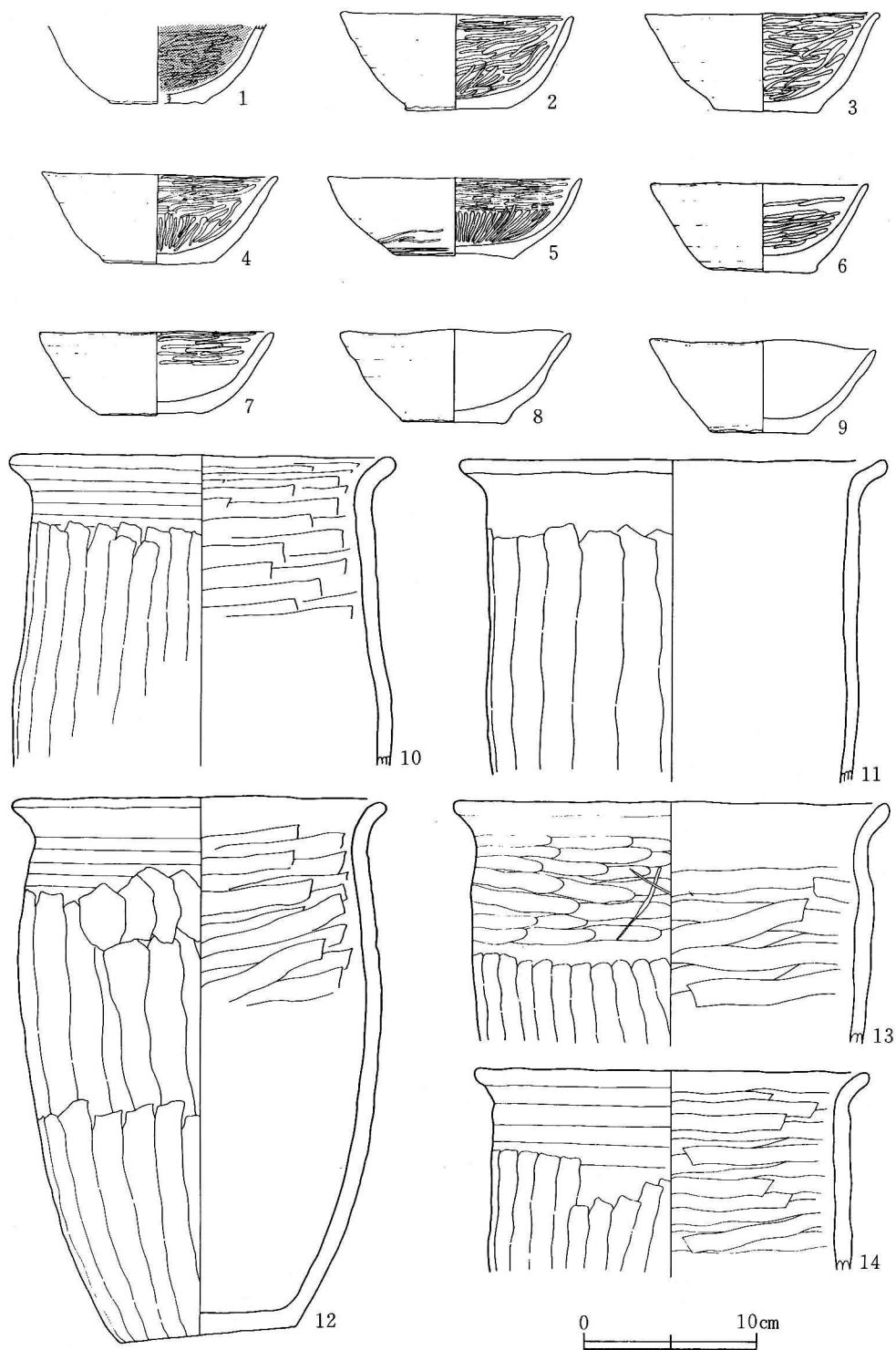
第1号竪穴住居跡では、坏形・蓋形・甕形土師器の3器種で構成されている。

第104号竪穴住居跡出土土器群 （第15・16図）

第104号竪穴住居跡は、その埋土中に粒状の火山灰（大湯浮石層）を堆積させており、床面上から9点の坏形土師器、1点の鍋形土師器の他、甕形土師器も多く出土した。

坏形土師器9点は、その整形技法から3大別6細分できる。

- A. 轆轤から回転糸切り技法により切り離し、内面を篋磨き後、黒色処理した土器（1）
- B. 轆轤から回転糸切り技法により切り離し、内面を篋磨きした土器（2～7）
 - B-1 内面にアランダムな篋磨きをした土器（2・3）
 - B-2-① 内面の上半を横方向、下半を放射状に篋磨きをした土器（4）
 - B-2-② 内面の上半を横方向、下半を放射状に篋磨きをし、外面底辺部を横方向に篋なでした土器（5）
 - B-3 内面に横方向の篋磨きを施した土器（6・7）
- C. 轆轤から回転糸切り技法により切り離し、内・外面に何ら調整を加えず、黒斑のない土器（8・9）



第15図 中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)

プロポーションは、(2・7)、(4・6)、(8・9)、3、5の5タイプに分けられる。この中で、5の土器のプロポーションは他の土器と比べ異質な感がある。色調は浅黄橙色、橙色、黄橙色を呈する。

甕形土師器は、口縁部の形状と調整方法から4大別9細分できる。

A. やや短い口縁部が外反する土器 (10~15)

A-1 外面の口縁部を横方向に篋などで、胴部を篋削りし、内面を篋なでした土器
(10・12・14・16)

A-2 外面の胴部を篋削りした土器 (11)

A-3 外面の口縁部を強い横方向の指などで、胴部を篋などで、内面を篋なでした土器
(13)

B. 短い口縁部が強く外反する土器 (16~18・21)

B-1 一(1) 外面を全面篋などで後、指なでし、内面の上半に横方向の篋なでをした土器
(16)

B-1 一(2) 上半にある最大胴径部分から下方を篋なでし、内面の最大胴径部分周辺を横方向に篋なでした土器 (17・21)

B-2 外面の頸部以下を篋削りし、内面の頸部以下の狭い部分を横方向に篋なでした土器 (18)

C. 短い口縁部がわずかに外傾する土器 (19・20)

C-1 外面の頸部以下を篋なでし、内面は上半を横方向に篋なでした土器 (19)

C-2 外面の頸部以下を篋などで後、下半のみ指なでした土器 (20)

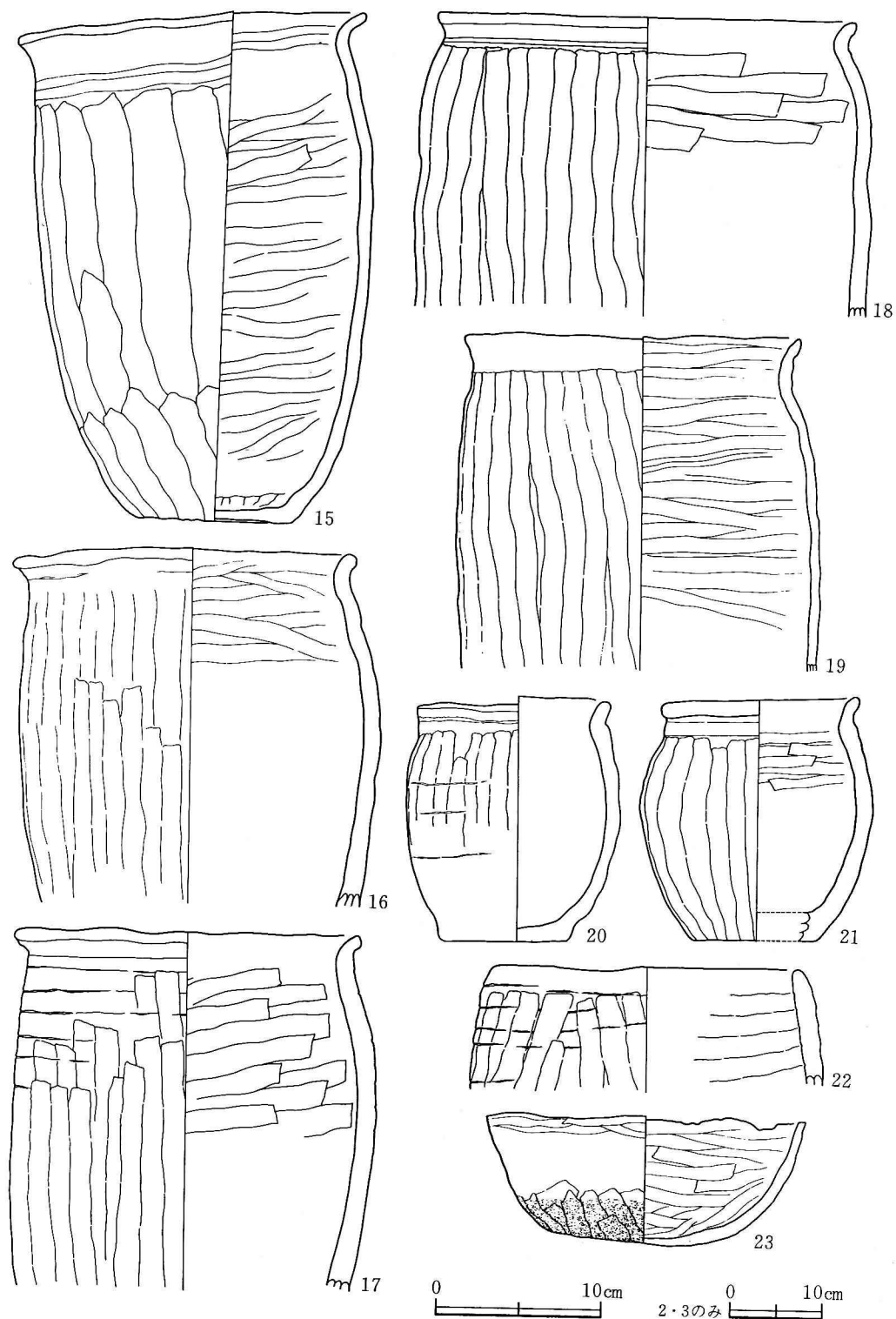
D. 口縁部が内傾する土器 (22)

D-1 内・外面とも篋なでした土器 (22)

砂粒を多量に含む胎土を使用しているので器面がザラザラしており、成形方法（粘土紐巻き上げ）がわかる程、粗いつくり方をしている土器が多い。器面を篋削りする土器が多いが、なかでも11・12・15は、所謂「ナタ切り」である。内面は、胴上半にのみ篋なでした土器が多い。底部の観察できる土器では、外面が篋なで (12)、平滑 (15)、木葉痕 (20・21) となっている。プロポーションは、口径に比して底径が大きく、胴張りの強い土器である。

鍋形土師器は、粘土紐巻き上げにより成形され、平底風を呈する。外面は、底部が篋削りされ、口縁部は横方向に篋なでされている。内面は全面篋なでされている。口唇は、横方向に篋削りされ扁平になっている。底部外面には、火熱による赤変が認められ、内面でも底部には煤が付着したような黒変が認められる。黄橙色～褐色を呈する。

中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群は、坏形・甕形（大・小）・鍋形土師器の3器種で



第16図 中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群実測図 (2)

構成されている。

第107号竪穴住居跡出土土器群 (第17・18図)

本竪穴住居群は、粒状火山灰の混入をみない黒褐色土を埋土としているが、床面に炭化した禾本科植物や焼土及び自然礫が多量に検出された所謂焼失家屋である。

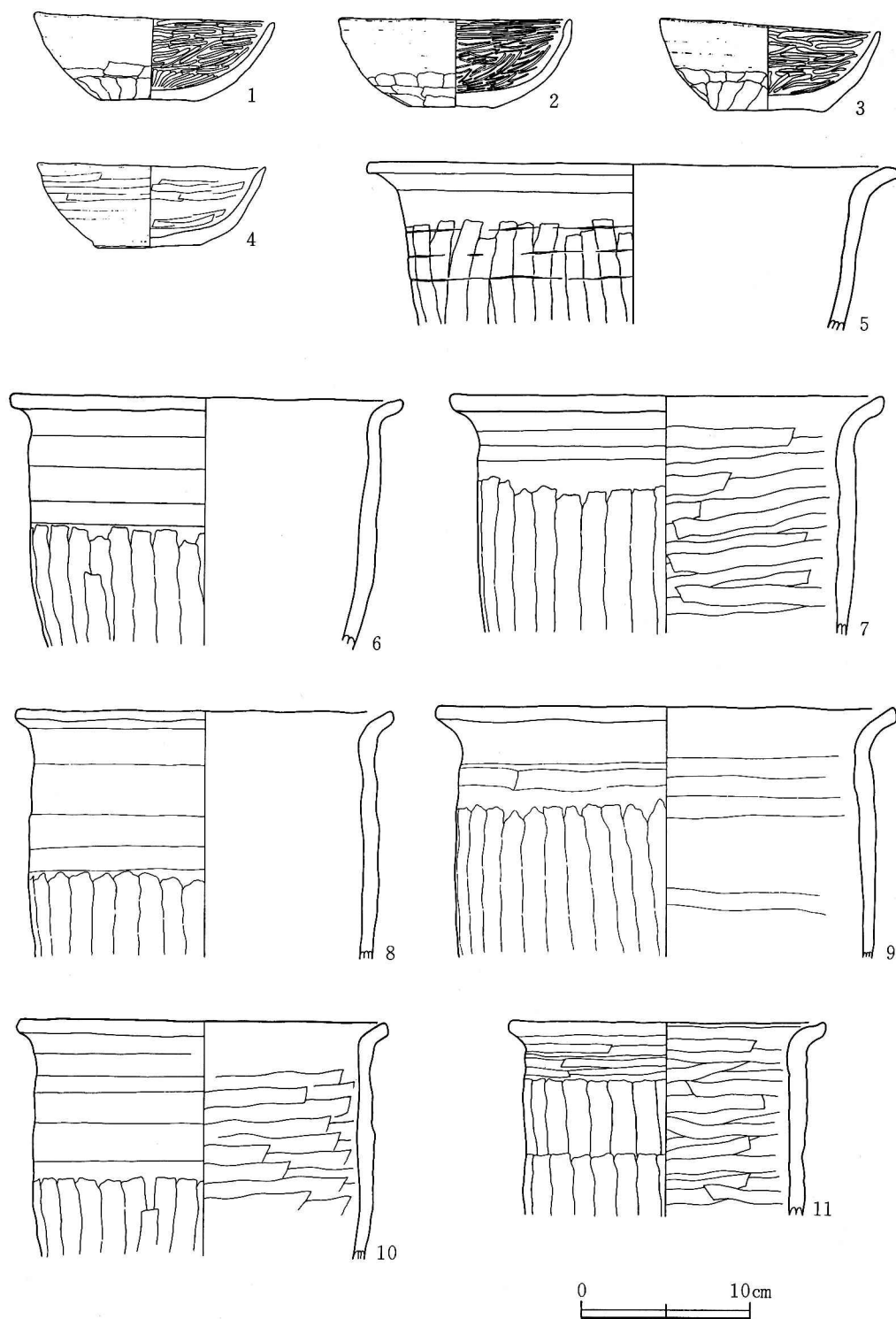
報告書では、19点図化されているが、本稿では器種・器形の明確な16点を図化・説明する。

坏形土師器は、4点出土しており、いずれも回転糸切り技法により轆轤から切り離されたあと、内・外面に整形のため調整を行なっている。

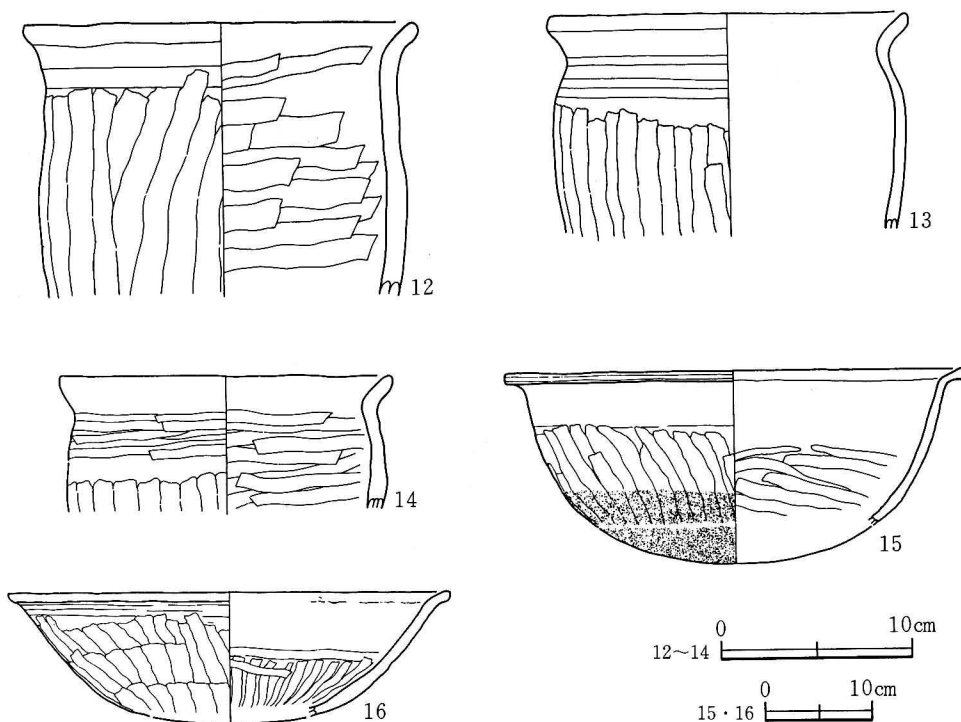
1. 器外面に粘土紐の巻き上げ痕か、胎土に含まれた細礫の移動痕か明確でないが、凹線が数条認められる。轆轤から切り離された後、外面底辺部を手持ち篋削りし、内面は、細かい篋磨き後、黒色処理されている。にぶい黄橙色を呈する。口径14.1cm、高さ5cm、底径5.7cm。床面上から出土した。
2. 轆轤から切り離し後、外面底辺部を手持ち篋削りし、内面は細かい篋磨き後、黒色処理している。胎土に砂礫を多く混入している。浅黄橙色を呈する。口径13.6cm、高さ5.2cm、底径5cm。かまど左側袖部近くの床面上から出土した。
3. 轆轤から切り離し後、外面底辺部を手持ち篋削りし、内面は細かい篋磨き後、黒色処理している。胎土にシルト質砂を混入しているためか、器表はなめらかである。橙色を呈する。口径13cm、高さ5.1cm、底径6.4cm。かまど右袖部内側の焼土上から出土した。
4. 轆轤から切り離し後、内・外面とも篋なでしている。胎土にシルト質砂を混入しているためか、器表はなめらかである。にぶい橙色を呈する。口径13.3cm、高さ5cm、底径5.9cm。床面上から出土した。

甕形土師器は、10点図示したが、口縁部の形状により4分類できる。

- 1類 短かい口縁部が大きく外反する類(5・6)
- 2類 短かい口縁部が外傾する類(7～10・12)
- 3類 短かい口縁部が大きく外反したあと、口唇部が立ち上る類(11)
- 4類 頸部で一度狭くなったあと「く」の字状に大きく外傾する類(13・14)
5. 外面に粘土紐巻上痕が残る甕形土師器である。胴部外面を篋なでし、口唇部を篋状工具で調整している。胎土に砂礫を混入し、にぶい橙色～橙色を呈する。口径31cm、現高9.4cm。埋土中から出土した。
- 6・8・13. 轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向に篋なでしたあと、下半を篋削りした甕形土師器である。いずれも胎土に砂礫を混入し、褐灰～にぶい黄橙色を呈する。6が口径23cm、現高14.5cm。8が口径22cm、現高14.4cm。13が口径18.5cm、現高11.5cm。いずれも埋土中から出土した。



第17図 中の崎遺跡第107号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)



第18図 中の崎遺跡第107号竪穴住居跡出土土器群実測図(2)

7・9～12・14. 轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向に篋なでをしたあと、下半を篋削りしている。内面は、横方向に篋なでしている。いずれも胎土に砂礫を混入している。7は口径25.2cm, 現高14cmで、にぶい黄橙色～浅黄橙色を呈する。9は口径20.4cm, 現高11.3cmでにぶい黄橙色を呈する。10は口径21.3cm, 現高13.4cmでにぶい黄橙色を呈する。11は口径13.3cm, 現高11.4cmで浅黄橙色～灰黄褐色を呈する。12は口径20cm, 現高14cmでにぶい橙色を呈する。14は口径17cm, 現高7cmでにぶい褐色～にぶい橙色を呈する。いずれも埋土中から出土した。

鍋形土師器は2点出土している。いずれも底部を欠失するが丸底と推定される。(報告書では、5も鍋と判断され3点出土となっているが、検討の結果、5は甕形と判断した。)いずれも胎土に砂礫を多く混入している。15は体部外面を篋削り、内面を篋なでしており、口径37.5cm 現高12.6cmで浅黄橙色を呈する。外面の口縁部下に炭質物が付着し、底辺部に煤状炭化物が付着している。16は体部外面に弱い篋削り、内面下半に篋なでをしている。浅黄橙色～暗褐色を呈するが、外面体部上半に粘質の炭化物が多く付着している。口径35.6cm, 現高10.2cm。いずれも埋土中からの出土である。第107号竪穴住居跡は、坏形・鍋形・甕形土師器の3器種で構成されている。(未了)